鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（184）

県道阿多川辺線整備事業（花瀬工区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）

弥十山遺跡（やじゅうやま）

（南さつま市金峰町）

２０１５年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序　　文

この報告書は，阿多川辺線整備事業（花瀬工区）に伴って，平成24年度から平成25年度にかけて実施した南さつま市金峰町花瀬に所在する弥十山遺跡の発掘調査の記録です。

弥十山遺跡では縄文時代後期を中心とした土器や石器，石器製作の痕跡などが発見され，南薩地方での数少ない縄文後期の遺跡となりました。なかでも磨り消し縄文を施す土器は北部九州からの文化の流れを解明する上で貴重な資料となることと思います。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査にあたり御協力をいただいた，南薩地域振興局土木建築課，南さつま市教育委員会，関係各機関及び発掘調査・整理作業に従事された方々に厚くお礼を申し上げます。

平成27年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　井ノ上　秀文

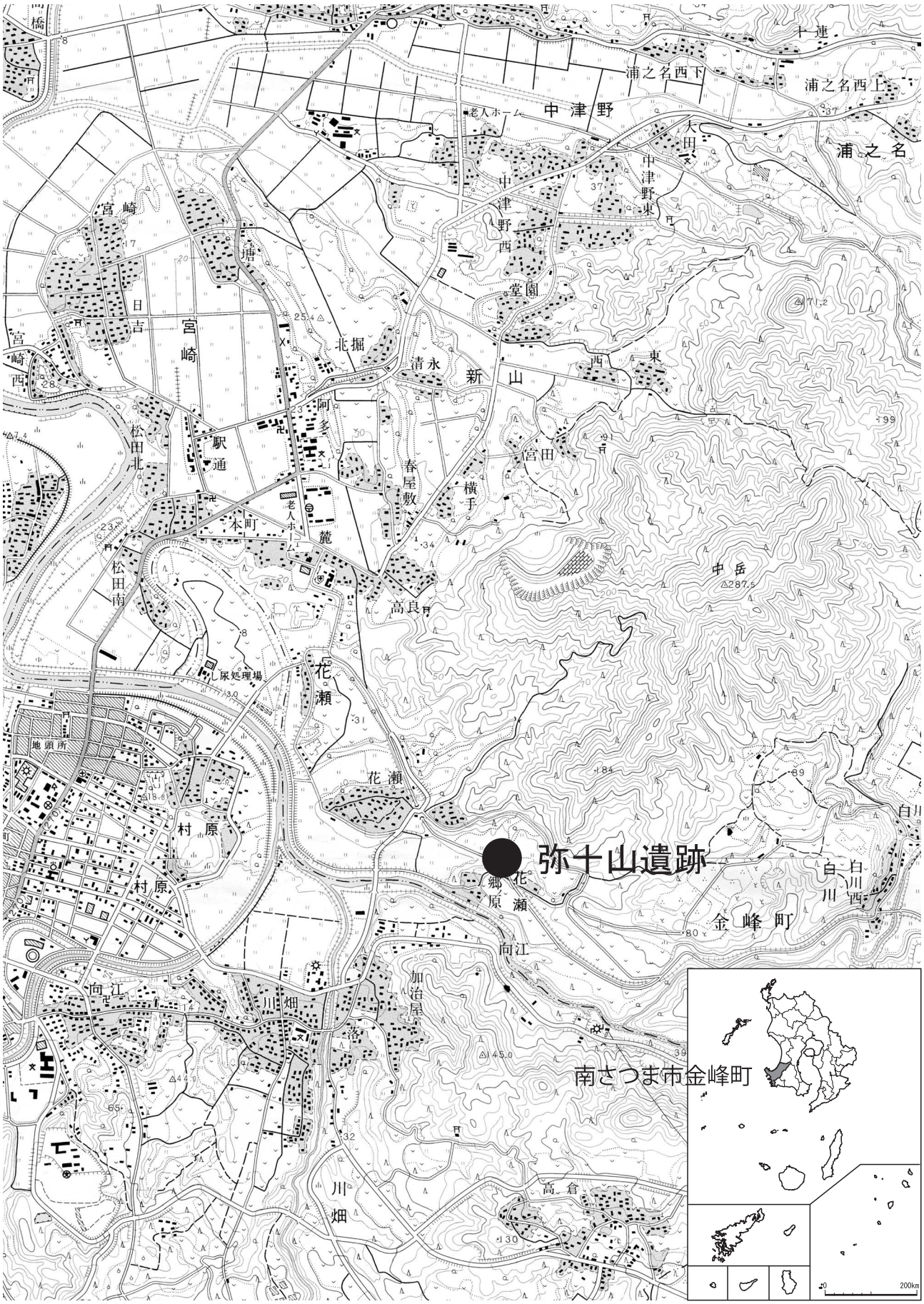
報　告　書　抄　録

ふりがな	やじゅうやま
書名	弥十山遺跡
副書名	県道阿多川辺線改築（花瀬工区）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅰ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	184
編著者名	有馬　孝一
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL　0995-48-5811
発行年月日	西暦2015年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	発掘原因
やじゅうやまいせき 弥十山遺跡	かごしまけん 鹿児島県 みなみさつまし 南さつま市 きんぽうちょうはなぜ 金峰町 花瀬	462209	14293	31° 42′ 23″	130° 34′ 45″	試掘 20120125 本調査 20130605 ～ 20130627	433	道阿多川辺線改築（花瀬工区）事業に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
弥十山遺跡	散布地	縄文時代前期 縄文時代中期 縄文時代後期 弥生時代 近世以降	 溝状遺構	轟式土器 深浦式土器 指宿式土器 納曽式土器 辛川式土器 丸尾式土器 石鏃，磨石 石皿 磨製石斧 中津野式土器	

遺跡の概要	南薩地方では数少ない、縄文時代後期の遺物が中心に出土する遺跡である。磨消縄文系の土器の出土は，北部九州からの文化の流れを考える上で貴重な発見となった。



遺跡位置図（S＝1／25,000）

例　　言

1　本書は，県道阿多川辺線整備事業（花瀬工区）に伴う弥十山遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は，鹿児島県南さつま市金峰町花瀬に所在する。

3　発掘調査は，南薩地域振興局土木建築課（事業主体）から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

4　発掘調査は，平成25年度に実施し，整理・報告書作成作業は平成26年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。

5　掲載遺物番号は通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。

6　遺物注記等で用いた遺跡記号は「ＹＪＹ」である。

7　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。

8　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。

9　本書で使用した方位は，すべて磁北である。

10　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，調査担当者が行った。

11　遺構図及び遺物分布図の作成及びトレースは有馬が，整理作業員の協力を得て行った。

12　出土遺物の実測・トレースは，有馬が整理作業員の協力を得て行った。

13　出土遺物の写真撮影は辻が行った。

14　本書の執筆，編集は有馬が行った。

15　本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

目　　次

序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言
目次

第１章　発掘調査の経過…… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
　第２節　事前調査 …… 1
　第３節　本調査…… 1
　第４節　整理・報告書作成 …… 2

第２章　遺跡の位置と環境…… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　発掘調査の方法と成果 …… 7
　第１節　発掘調査の方法…… 7
　　１　調査の方法 …… 7
　　２　遺構の認定と検出方法 …… 7
　第２節　層序 …… 7
　第３節　調査の成果 …… 9
　　１　縄文時代の調査…… 9
　　２　弥生時代の調査…… 20
　　３　その他の時代の調査 …… 21

第４章　総括 …… 22

挿 図 目 次

第１図　グリッド配置及び周辺地形 …… 4
第２図　周辺遺跡位置図 …… 5
第３図　基本層序 …… 7
第４図　土層断面図 …… 8
第５図　遺物出土状況 …… 9
第６図　Ⅰ～Ⅳ類土器 …… 10
第７図　Ⅴ類・Ⅵ類土器（１）…… 12
第８図　Ⅵ類土器（２）…… 13
第９図　Ⅵ類土器（３）…… 14
第10図　Ⅵ類土器（４）…… 15
第11図　Ⅶ類土器・底部 …… 16
第12図　石器（１）…… 18
第13図　石器（２）…… 19
第14図　Ⅷ類土器 …… 20
第15図　遺構配置図 …… 21
第16図　溝状遺構検出状況 …… 21

表目次・図版目次

表　目　次

表１　周辺遺跡一覧表 …… 6
表２　土器観察表（１）…… 11
表３　土器観察表（２）…… 14
表４　土器観察表（３）…… 15
表５　土器観察表（４）…… 17
表６　石器観察表 …… 20
表７　土器観察表（５）…… 21

図 版 目 次

図版１　発掘調査（１）…… 23
図版２　発掘調査（２）…… 24
図版３　Ⅰ～Ⅴ類土器 …… 25
図版４　Ⅵ類土器（１）…… 26
図版５　Ⅵ類土器（２），Ⅶ類土器，底部 …… 27
図版６　石器，Ⅷ類土器 …… 28

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，鹿児島県土木部道路建設課（南薩地域振興局土木建築課・以下道路建設課）は，県道阿多川辺線改築（花瀬工区）事業を計画し，事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下，文化財課）に照会した。

この計画に伴い文化財課は，事業地が周知の遺跡である弥十山遺跡の範囲内にあることを確認した。この結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて，道路建設課・文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）の三者で協議を行い，埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため，事業着手前に試掘調査を実施することになった。

試掘調査は，文化財課及び埋文センターが担当することとし，平成25年１月25日に実施した。その結果，遺物の存在を確認した。

そこで，再度三者で協議を行い，弥十山遺跡について本調査を実施することとなった。調査は埋文センターが担当し，平成25年６月５日から平成25年６月27日（実働13日間）にかけて実施した。

第２節　事前調査

１　試掘調査

本遺跡の試掘調査は平成25年１月25日の１日間で実施した。

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	南薩地域振興局土木建築課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県教育庁文化財課	
	課長	宇都　法道
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課	
	課長補佐	喜平　和隆
	主任文化財主事兼	
	埋蔵文化財係長	前迫　亮一
調査担当	鹿児島県教育庁文化財課	
	文化財主事	馬籠　亮道
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	調査第一課長	井口　俊二

第３節　本調査

本遺跡の本調査は，平成25年６月５日から平成25年６月27日の13日間にわたり実施した。

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	南薩地域振興局土木建築課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	井ノ上秀文
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	次長兼総務課長	新小田　穣
	調査課長	堂込　秀人
	調査課第二調査係長	大久保浩二
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	有馬　孝一
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	主幹兼総務係長	有馬　博文

調査の経過（日誌抄より）

H25．６．５～６．７

オリエンテーション，調査開始。環境整備，Ａ・Ｂ－１～３区表土剥ぎ・包含層掘り下げ。

井ノ上所長現地指導（５日）

H25．６．10～６．14

Ａ・Ｂ－１～３区掘り下げ，溝状遺構検出，遺構検出状況写真撮影，遺構掘り下げ，遺構実測，完掘状況写真撮影。

Ｂ－２・３区下層確認トレンチ掘り下げ。

Ｂ－５・６区先行トレンチ掘り下げ。

大久保第２調査係長現地調査（10日），有馬総務係長・下堂薗主査現地指導（11日），東第１調査係長・池之上主事安全パトロール（12日），新小田次長現地指導（12日）

H25．６．17～６．21

Ｂ－２・３区壁面清掃，土層断面写真撮影，土層断面実測。

Ａ・Ｂ－３～５区表土剥ぎ，包含層掘り下げ，遺物出土状況写真撮影，遺物取り上げ。

Ａ・Ｂ－１・２区埋め戻し。台風接近のため耐風養生。

H25．６．24～６．27

Ａ・Ｂ－３～５区掘り下げ，遺物取り上げ，遺構精査，完掘状況写真撮影。

発掘機材搬出，調査終了。

第４節　整理・報告書作成

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成26年10月１日から平成26年11月27日にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

出土遺物の水洗い，注記，遺構内遺物と包含層遺物の仕分け，遺物の実測・拓本，図面のトレース・レイアウトや原稿執筆等の編集作業を行った。整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおり。

作成体制（平成26年度）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	南薩地域振興局土木建築課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	井ノ上秀文
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	次長兼総務課長	中島　治
	調査課長	前迫　亮一
	第二調査係長	今村　敏照
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
文化財主事		有馬　孝一
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	主幹兼総務係長	有馬　博文
	主事	池ノ上勝太

報告書作成指導委員会　　平成26年11月25日
前迫課長ほか　７名

（公財）埋蔵文化財調査センターと合同で実施

報告書作成検討委員会　　平成26年11月28日
井ノ上所長ほか８名

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置

遺跡の所在する南さつま市は薩摩半島西岸部のほぼ中央にあり，東は鹿児島市，南東部は南九州市，北は日置市に接し，西は吹上浜を介し東シナ海に面している。なかでも遺跡の所在する旧金峰町は，南さつま市の北端に位置する。

東部は金峰山（636m）を主峰とする森林地帯が広がり，南北に山脈が走り起伏に富んでいる。山麓から中央部にかけてはシラス台地となり，この中を旧吹上町十郎田に源を発する長谷川が南西に貫流し，景勝地川添で鹿児島市錫山に源流を発する万之瀬川と合流する。万之瀬川はさらに旧加世田市との境界付近を西流して支流堀川と合流し，吹上浜南端を横切って東シナ海に注いでいる。中央部は平野で耕地が多く，堀川流域には大水田地帯が広がっており，海岸沿いは吹上浜砂丘となっている。こうしたシラス台地と砂丘地には，縄文時代から弥生時代の良好な遺跡が多数存在している。

今回，調査対象となった弥十山遺跡は金峰町の南端に位置しており，万之瀬川河口から約９kmほど上流の右岸に所在する。万之瀬川から約100mほど内陸に入った標高約13mの河岸段丘上に立地し，遺跡北側には近くまで中岳の尾根が迫っており，緩やかな傾斜地には段々状に田畑が営まれている。

第２節　歴史的環境

南さつま市では，旧石器時代から歴史時代に至るまでの遺跡が数多く発見されている。これらの中には，学史上極めて重要な遺跡も含まれており，当地域が考古学研究の良好なフィールドであることを改めて示唆している。

（旧石器時代）

南さつま市の旧石器時代遺跡は，金峰町小中原遺跡，加世田祝原遺跡でナイフ形石器が出土し，金峰町山野原遺跡，加世田平田尻遺跡から細石器が発見されている。加世田春ノ山遺跡では，後期旧石器時代の礫群が発見されている。

（縄文時代）

縄文時代草創期の遺跡としては，加世田栫ノ原遺跡，志風頭遺跡が有名である。栫ノ原遺跡では連穴土坑・集石などの遺構が発見され，隆帯文土器・丸ノミ形磨製石斧が出土している。志風頭遺跡では，連穴土坑から出土した隆帯文土器の放射性年代測定の結果，11,860±50年BPの年代を得ている。縄文早期の遺跡では先述の栫ノ原遺跡，金峰町小中原遺跡があげられる。縄文時代前期の遺跡には，金峰町阿多貝塚，上焼田遺跡，上水流遺跡がある。上焼田遺跡では玦状耳飾りが出土している。上水流遺跡から曽畑式土器が単独で出土し，深浦式土器も多量に出土している。中期，後期の遺跡としては上水流遺跡で多くの春日式土器，指宿式土器，松山式土器や大型の集石が出土している。縄文晩期の遺跡では上加世田式土器の標識遺跡である上加世田遺跡がある。ここでは祭祀を伺わせる資料や勾玉，管玉などの様々な遺物が出土している。

（弥生時代）

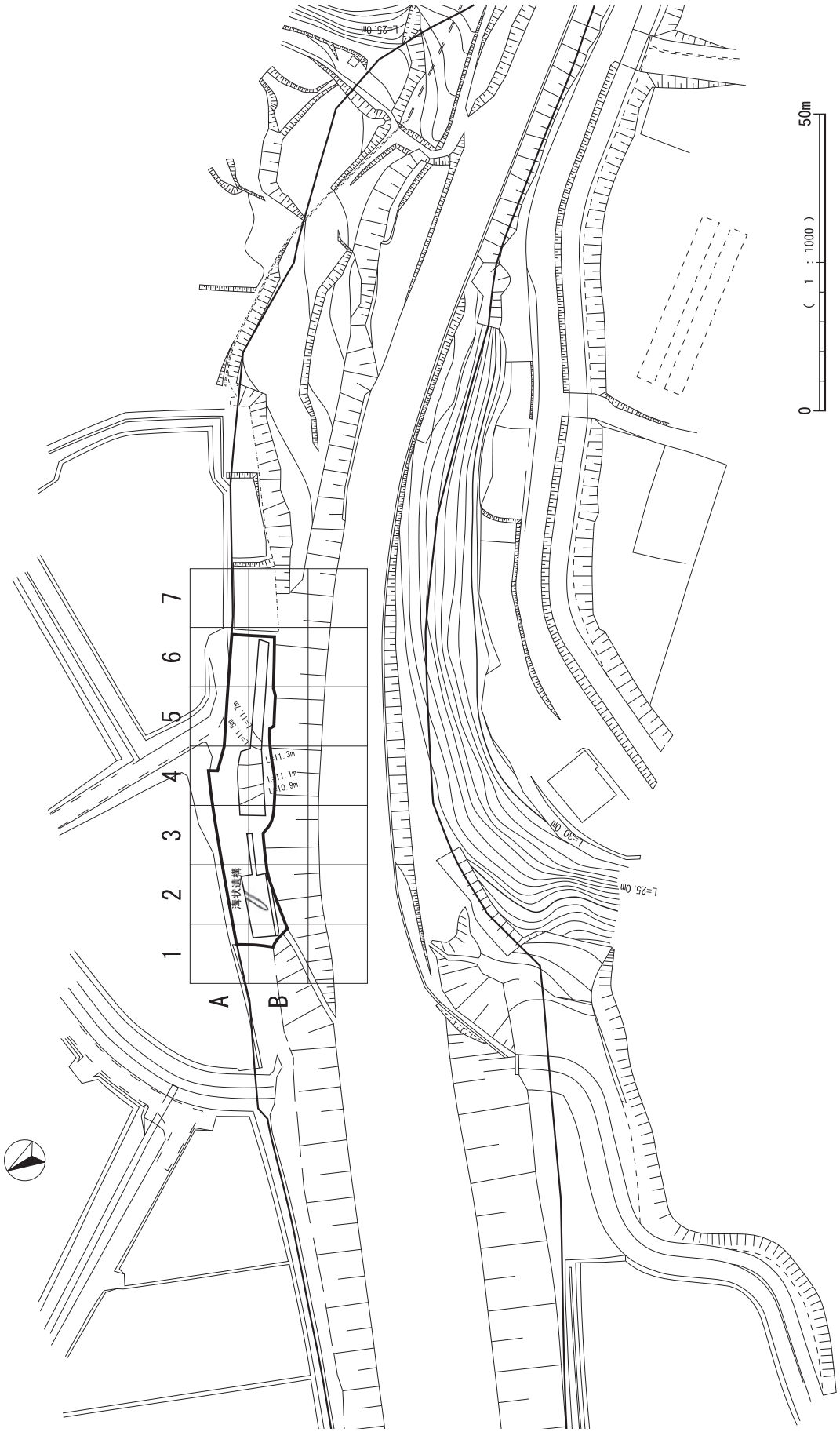
弥生時代の遺跡としては金峰町高橋貝塚，下小路遺跡，松木薗遺跡，中津野遺跡など学史的にも重要な遺跡が数多く発見されている。

（古墳時代）

古墳時代の遺跡は，4世紀代の可能性の高い加世田の奥山古墳，金峰の白糸原遺跡では竪穴住居跡が19軒検出された。

（古代以降）

古代では，小中原遺跡において「阿多」とヘラ書きされた土器が発見された。万ノ瀬川流域の遺跡で古代から中世にかけての良好な遺跡の発見が相次いだ，持躰松遺跡，渡畑遺跡，芝原遺跡などがそれにあたる。各地の窯で焼かれた陶磁器や中国からの輸入陶磁器などが多量に出土している。



第１図　グリッド配置及び周辺地形

弥十山遺跡
中津野
浦之名西下
浦之名西上
十連
浦之名
中津野東
堂園
宮崎
日吉
北掘
清永
新山
西
東
阿多
宮田
駅通
松田北
松田南
春日
横手
麓
高良
中岳
花瀬
村原
金峰町
向江
川畑
加治屋
万之瀬川
高倉
大原野
白川
郷原
し尿処理場
老人ホーム
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48

第２図　遺跡位置図

表１　周辺遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	所　在　地	地形	遺 跡 の 時 代	備 考
1	下小路	南さつま市金峰町大字高橋	台地	弥生時代	
2	高橋	南さつま市金峰町高橋字高橋他	平地	弥生時代	
3	高橋貝塚	南さつま市金峰町大字高橋亀木・小川路	台地	弥生時代	
4	阿多貝塚	南さつま市金峰町大字宮崎上焼田・貝殻崎・七ノ坪	台地	縄文時代, 弥生時代, 古墳時代	
5	貝殻崎城跡	南さつま市金峰町大字中津野下鷺田	台地	中世	
6	中津野下原	南さつま市金峰町大字中津野夏町	台地	縄文時代, 弥生時代	
7	平畑	南さつま市金峰町大字中津野平畑	台地	縄文時代, 弥生時代, 古墳時代, 中世	
8	中津野	南さつま市金峰町大字中津野原ノ畠	台地	弥生時代	
9	中津野城跡	南さつま市金峰町大字中津野城ノ越・原ノ畠	台地	中世	
10	南下	南さつま市金峰町尾下字南下	平地	古墳時代	
11	筆付	南さつま市金峰町大字尾下宮後・馬渡・川渡・岩城手・筆付	平地	縄文時代, 弥生時代, 古墳時代, 古代, 中世	
12	上山野	南さつま市金峰町大字中津野上山野	台地	縄文時代, 古代	
13	江田城跡	南さつま市金峰町大字中津野城ノ越・原ノ畠	台地	中世	
14	貝曲り	南さつま市金峰町大字中津野貝曲・上床原・樋之口	台地	古墳時代, 古代	
15	樋掛田	南さつま市金峰町大字浦之名樋掛田・御立田　他	台地	古墳時代, 古代, 中世	
16	上床城跡	南さつま市金峰町大字浦之名上床原・片平田・西之迫・東上床原・鍋浦	台地	中世	
17	外城	南さつま市金峰町大字浦之名外城・滑迫・正之迫	台地	旧石器時代, 縄文時代, 弥生時代, 古墳時代	
18	西立石原	南さつま市金峰町大字宮崎貝殻崎・西立石原・千上り・町ノ迫・入木田堀・北之堀・白貝田・上鷹田		弥生時代, 古墳時代	
19	小中原	南さつま市金峰町大字新山小中原・入木田堀・町之迫	台地	旧石器時代, 縄文時代, 弥生時代, 古墳時代, 古代, 中世	
20	立野原	南さつま市金峰町大字新山立野原・入木田迫・北長楽寺・南長楽寺		古墳時代	
21	三反田	南さつま市金峰町大字新山三反田・星の崎・赤兀・餅ヶ丸		弥生時代, 古墳時代	
22	白糸原	南さつま市金峰町大字宮崎白糸原・松田		縄文時代, 弥生時代, 古墳時代, 中世	
23	市薗	南さつま市金峰町大字宮崎市薗・瀬高・南西大畑	台地	縄文時代, 中世	
24	持躰松	南さつま市金峰町大字宮崎持躰松・渡畑	平地	縄文時代, 弥生時代, 古墳時代, 古代, 中世	
25	渡畑	南さつま市金峰町大字宮崎渡畑・渡原	平地	縄文時代, 古墳時代, 古代, 中世	
26	上宮寺跡	南さつま市金峰町大字宮崎持躰松・渡原	台地	中世, 中世 鎌倉	
27	松田南	南さつま市金峰町大字宮崎持躰松・渡原・濱崎	台地	縄文時代, 古墳時代, 中世	
28	芝原	南さつま市金峰町大字宮崎濱崎	平地	縄文時代, 古墳時代, 古代, 中世	
29	今城跡	南さつま市金峰町大字花瀬下今城原	台地	弥生時代, 中世	
30	大迫田	南さつま市金峰町大字花瀬大迫田	平地	中世	
31	花瀬今城原	南さつま市金峰町大字花瀬下今城原・上今城原・馬之目	台地	縄文時代, 弥生時代, 古墳時代	
32	森山	南さつま市金峰町大字花瀬森山・上水流	平地	縄文時代, 弥生時代, 古墳時代, 古代, 中世	
33	花瀬	南さつま市金峰町大字花瀬花瀬	台地	古墳時代, 近世	
34	上水流	南さつま市金峰町大字花瀬上水流	平地	縄文時代, 弥生時代, 古墳時代, 古代, 中世, 近世	
35	上水流B	南さつま市金峰町大字花瀬上水流・古屋敷	台地	旧石器時代, 縄文時代, 古代, 近世	
36	中岳山麓古窯跡群	南さつま市金峰町大字花瀬下原・弥十山・千貫松	山地	古代, 古代 平安	
37	荒平古窯跡	南さつま市金峰町大字花瀬荒平・倉谷	山地	古代, 古代 平安	
38	弥十山	南さつま市金峰町大字花瀬針原・下原	台地	縄文時代	
39	郷ノ原	南さつま市金峰町大字花瀬鮎受・下原	台地	古墳時代	
40	鮎受	南さつま市金峰町大字花瀬鮎受	台地	古墳時代	
41	宇治野原	南さつま市金峰町大字白川宇治野原・下白樫野・山仁田原・西牟田・垂門	台地	旧石器時代, 縄文時代, 古墳時代	
42	白樫野B	南さつま市金峰町大字白川下白樫野・中白樫野		旧石器時代, 縄文時代, 古墳時代, 中世	
43	長野原	南さつま市金峰町大字白川長野原・南ノ迫・羽根地・垂門・川添		縄文時代, 古墳時代	
44	永田	南さつま市加世田川畑永田	平地	古墳時代	
45	加治屋	南さつま市加世田川畑岩山	丘陵	縄文時代, 弥生時代, 古墳時代, 古代	
46	松坂原	南さつま市加世田川畑松坂原	台地	旧石器時代, 縄文時代, 弥生時代, 古墳時代	
47	兎ヶ城跡	南九州市川辺町下山田兎ヶ城	台地	古墳時代, 中世	
48	津フジ	南九州市川辺町下山田津フジ	台地	旧石器時代, 縄文時代, 古墳時代	

第３章　調査の方法と成果

第１節　発掘調査の方法

１　調査の方法

今回発掘調査を行った弥十山遺跡は，薩摩半島西岸に位置する南さつま市（旧金峰町）に所在する。本遺跡は中岳（標高287.5m）の南西側に位置し，山地から緩やかに傾斜してきた台地の端部近くにあり，今回の調査地点はその末端に形成された谷部に立地する。

調査区のグリッドは，遺跡全体をカバーできるよう工事用杭 No 40＋10（世界測地系Ｘ＝−175003.685，Ｙ＝−62184.650）と工事用杭No41（世界測地系Ｘ＝−175008.790，Ｙ＝−62176.052）を結んだ線及びその延長線を主軸としNo41で主軸と直交する線を中心に設定した。

具体的には西側から東側に向かって１，２，３…，北側から南側に向かってＡ，Ｂ…と区割りを設定した。

発掘調査は平成25年６月５日から平成25年６月27日までの作業員実働13日間で実施した。調査対象面積は433㎡である。調査の方法は，重機（バックホウ）によって表土を除去した後，遺物を包含する層は山鍬，ジョレンなどを使用しながら人力で掘り下げを行った。

遺物の取り上げは，残存良好なものは取り上げ番号を付し，トータルステーションにて座標及び標高を記録し，その他については層位ごとのグリッド一括で取り上げを行った。

２　遺構の認定と検出方法

検出された遺構はⅣa層上面で溝状遺構が１条のみであった。Ⅳa層上面において，黒色を埋土とする帯状の掘り込みを確認し，検出状況の写真撮影を行った後，帯状の遺構に直交する主軸ラインを設定し，埋土状況確認のベルトを残し埋土の掘り下げを行った。その後，埋土状況の写真撮影を行い，図面作成後，完掘し，さらに完掘状況の写真撮影を行った。

第２節　層序

弥十山遺跡の基本層序は次の通りである。基本層序はＡ−３・４区に設定した。１Ｔを基準土層とした。調査区は西方向に下る傾斜を呈し，４区及び５区の一部を除いて，薩南中央鉄道（阿多−知覧線）の建設時の削平及び戦後の水田耕作により遺物包含層のほとんどが失われていた。

Ⅰ層は表土で，前述の水田耕作痕が上位に薩南中央鉄道建設時の削平痕が下位に分層できるが一括して取り扱った。

Ⅱ層はプライマリーな層としては残存していないが，周辺遺跡と同様の黒色土が遺構内にみられることから基本層序の中に含めることとした。

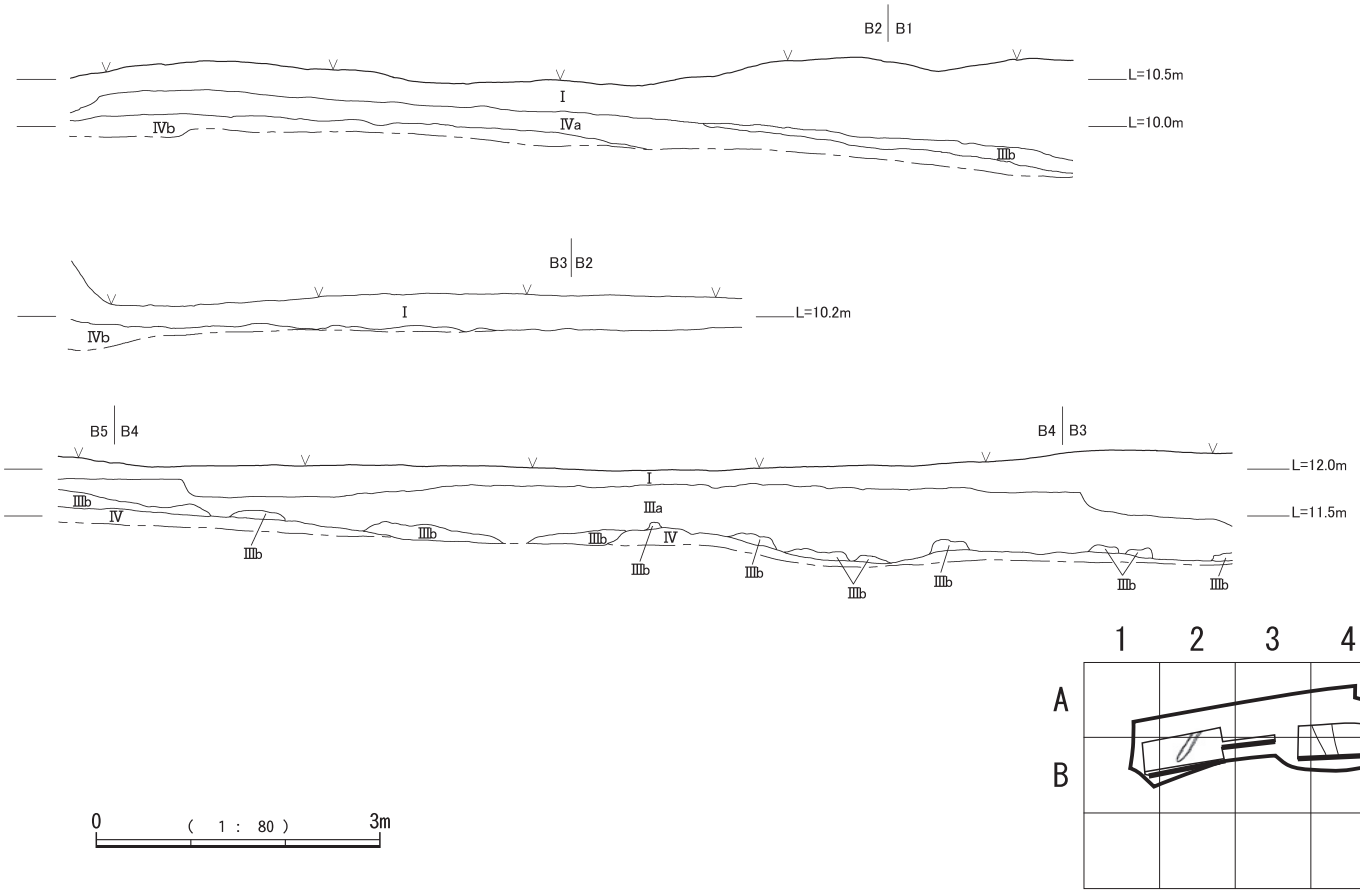
Ⅲa層はアカホヤと呼ばれる約7,300年前の喜界カルデラ起源の火山灰腐植土で，縄文時代前期から弥生時代の遺物包含層となる。遺物の主体は縄文時代後期である。

Ⅲｂ層はアカホヤ火山灰の１次堆積物で橙色パミスが多量に含まれる層で面的な広がりはないが，Ⅲ層下位にブロック状に点在する。

Ⅳ層以下からの遺物・遺構の出土はみられなかった。

Ⅰ	Ⅰ　表土　造成土及び水田層
Ⅱ	Ⅱ　黒色土
Ⅲa	Ⅲa層　橙褐色腐植土　　アカホヤ腐食土
Ⅲb	Ⅲb層　橙色パミス　　アカホヤ一次堆積
Ⅳa	Ⅳa層　明黄褐色土
Ⅳb	Ⅳb層　褐色土
Ⅳc	Ⅳc層　暗褐色土
Ⅴa	Ⅴa層　灰褐色砂質土
Ⅴb	Ⅴb層　橙色火山灰土
Ⅴc	Ⅴc層　灰褐色砂質土
Ⅵ	Ⅵ層　茶褐色粘質土

第３図　基本層序


B2 B1
L=10.5m
L=10.0m
I
IVa
IVb
IIIb
B3 B2
L=10.2m
I
IVb
B5 B4
B4 B3
L=12.0m
L=11.5m
I
IIIa
IIIb
IV
IIIb
IIIb
IV
IIIb
IIIb
IIIb
IIIb
IIIb
IIIb
0 (1 : 80) 3m
1 2 3 4 5 6 7
A
B

第４図　土層断面図

第３節　調査の成果

１　縄文時代の調査

（１）調査の概要

縄文時代の調査は，遺物包含層の残存するＡ・Ｂ−４・５区を中心に行った。バックホーにより表土を除去すると直下にⅢa層が現れ，そこから人力による掘り下げを行った。

遺物のうち小破片は，同一層，各グリッドごとの一括で取り上げを行った。大型の破片等については，遺物の種類，出土層を遺物台帳に記録し，トータルステーションを用いて座標，レベルを記録した。

遺構は検出されなかった。

（２）遺物

遺物のうち土器，石器はⅢa層上位に集中し，縄文時代前期から後期の遺物が混在する状態で出土した。また，石器製作址と思われる黒曜石チップ，頁岩チップのブロックがⅢa層下位から出土した。縄文時代に相当すると思われる。遺物は総数423点出土し，内81点を掲載した。出土遺物の分類概要を説明した後，それぞれの詳細について記述する。

土器

Ⅰ類土器（第６図１）

器形がわずかに外反し，外面に横走するミミズばれ状の突帯が数条巡り，内面は貝殻腹縁による条痕が残る。

Ⅱ類土器（第６図２）

口縁部がわずかに内弯し，外面に縦位の貝殻条痕を施す。

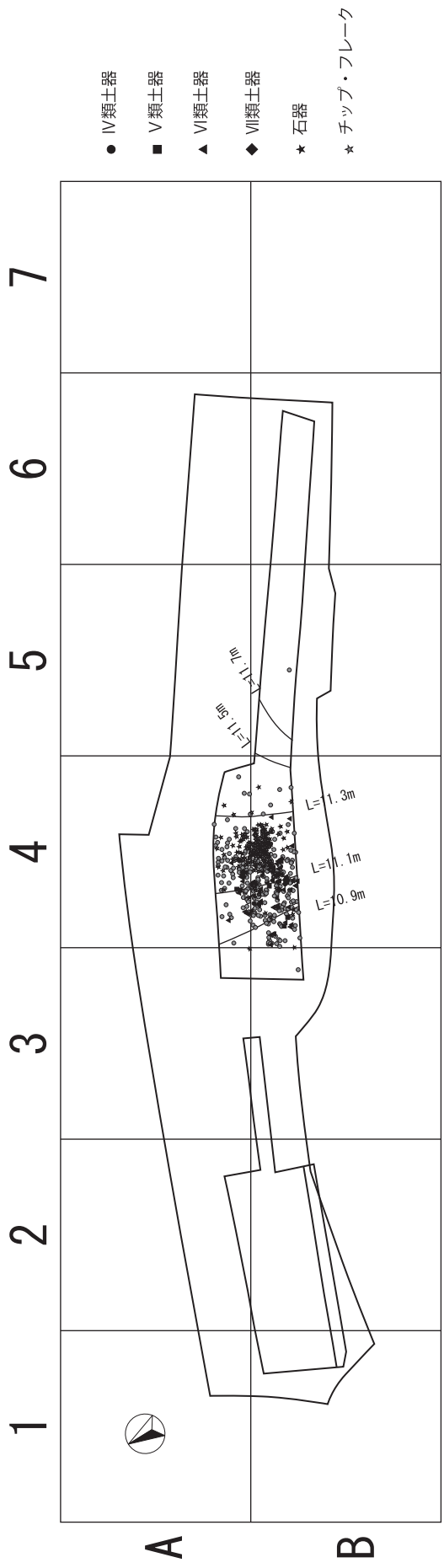
Ⅲ類土器（第６図３）

口縁部はわずかに外反する。口縁下位に１条のミミズばれ状の突帯が巡り，その下位に縦位から斜位の同様の突帯と，直線的な沈線が組み合わせて施される。

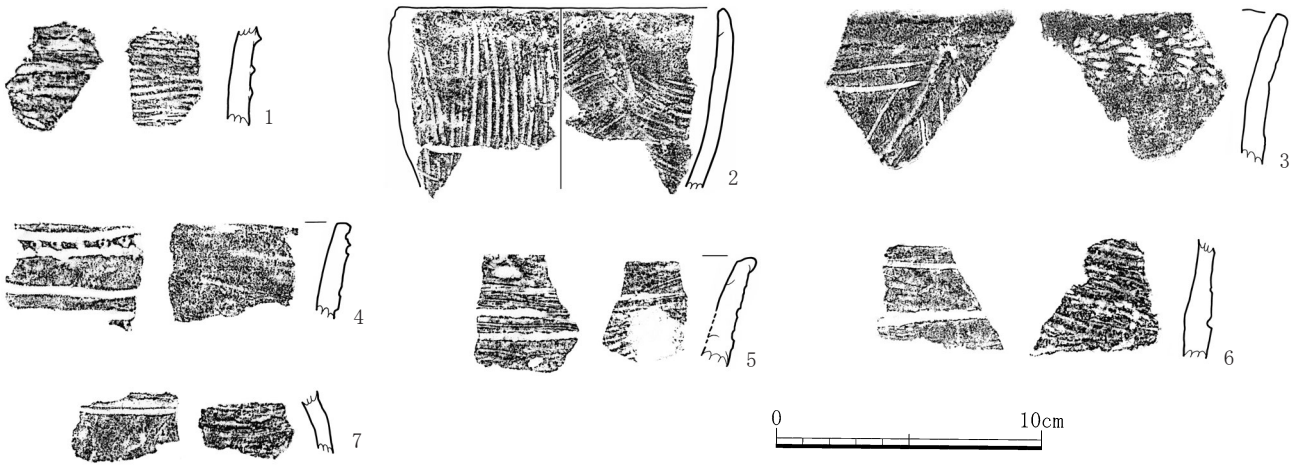
口縁部内面に貝殻腹縁による押し引き文が施される。

Ⅳ類土器（第６図４〜７）

器形はわずかに外傾する。器面に２条１単位の沈線文が施される。口唇部に刻みを施すもの，沈線間に竹管状の工具で刺突を施すものもみられる一群である。



第５図　遺物出土状況



第６図　Ⅰ～Ⅳ類土器

Ⅴ類土器（第７図８～13）

口縁部はわずかに外傾から内弯する形状を呈する。

口縁部には沈線や連点が巡り，沈線間に貝殻腹縁刺突による磨消縄文を意識した文様が施される。また胴部付近にも同様の文様が施される一群である。

Ⅵ類土器（第７図14～第10図53）

器形は，胴部から緩いカーブを描きながらわずかに外傾し立ち上がり，口縁部でわずかに内弯する。口縁部と胴部に文様帯があり，沈線や連点が巡る。一部には文様区画沈線内に磨消縄文が施される。また，同様の器形で無文のものもみられる一群である。

Ⅶ類土器（第11図54～56）

口縁部は外傾し，口縁下位に斜位の連続した貝殻腹縁刺突文が巡る。胎土に金雲母が目立つのが特徴的である。

Ⅰ類土器（第６図１）

A－４区で１点出土した。１は胴部片で，器形はわずかに外傾する。外面にミミズばれ状の突帯が３条巡ることが確認できる。内面には貝殻条痕が明瞭に残る。

Ⅱ類土器（第６図２）

B－４区で１点出土した。２は口縁部片でわずかに外傾しながら内弯気味に立ち上がる器形である。外面に縦位の貝殻条痕が施される。口縁端部付近に炭化物が付着している。

Ⅲ類土器（第６図３）

B－５区で１点出土した。３は口縁部片でわずかに外反する。口縁直下に１条のミミズばれ状の突帯が巡り，その下位に縦位もしくは斜位の同様の突帯が施される。また突帯に平行するような沈線が組み合わされ施文される。

さらに内面上位には貝殻腹縁の押引文が施される。

Ⅳ類土器（第６図４～７）

４，５はわずかに外傾する口縁で，４は，おおむね２条１単位の横走する沈線が巡り，沈線間に竹管状の工具で連点文が施される。５は口唇部に刻みが施され，繊維痕が明瞭に残る沈線が巡る。内面には荒い削り痕が残る。６，７は胴部片で５同様の沈線が施され，内面にも荒い削り痕が残る。

Ⅴ類土器（第７図８～13）

８，９は口縁部で，８は外面に沈線文と沈線間に貝殻腹縁による刺突が施され，文様帯下位の篦状工具による連続刺突文から下は無文で丁寧なナデ調整である。９は口縁部をやや肥厚させる。口唇部と口縁部中位に篦状工具による連続刺突文が施され，外面には貝殻腹縁による綾杉状の刺突文が巡る。10は口縁部付近と思われる。肥厚部下に棒状工具による連点，貝殻腹縁による斜位の刺突が施される。11～13は胴部片で平行する沈線間に貝殻腹縁による刺突が施される。13は極細の沈線が描かれ貝殻腹縁の刺突も浅めである。

Ⅵ類土器（第７図14～第10図53）

14は口縁部がやや肥厚し，絡みあう沈線が施される。波頂部から粘土紐貼り付けが行われ，粘土紐上に刻みが施される。15は胴部がやや張る器形を呈する。口縁部の文様は細い沈線と篦状工具による連続刺突でシンプルで，胴部の文様が主体である。篦状工具による連続刺突，横位・斜位の沈線の組み合わせ，さらに縦位に「ｃ」字，逆「ｃ」字を組み合わせた半弧状組み合わせ文が施される。16は15と同一個体と思われる。口縁部の沈線は矩形となる。17，18は15と同一個体と考えられる。19は胴部片で胴部が張る。15と同様な沈線が描かれるが，縦位に連続した鍵状の沈線が施される。20～24は胴部から緩やかにカーブし立ち上がる器形で口縁部に横位，斜位の沈線，及び篦状工具による連続刺突文が施される。20，21は同一個体と思われる。口唇部にも胴部同様の篦状工具による刺突がみられる。22は口縁部がわずかに外反する。23は器壁がやや薄く，口縁部の沈線が長楕円形のモチーフで描かれる。口唇部は平坦に仕上げ，篦状工具による刺突を施す。24～26は口縁下部から頸部で，沈線と篦状工具による刺突がみられる。27～29は胴部片で沈線と連続刺突が施される。27，28は先端の細い工具で逆三角形の刺突が施される。29は連続する凹点が施される。30，31は口縁部沈線に鉤状のモチーフを使用している。32は波状口縁の波頂部で口縁にシャープな沈線で幾何学的文様を施す。33，34は口縁部が外反する。同一個体と思われる。35は器壁が厚く太めの沈線と細い沈線を組み合わせて施文する。36～41は胴部片で器面に沈線が施される。38，39は内面をミガキ調整している。40，41は他と同様なモチーフの沈線を施すが大振りでダイナミックな文様となる。40，41は同一個体の可能性が高い。42，43は胴部が張る器形を呈し，沈線間に磨消縄文を施す。内・外面ともに丁寧なミガキ調整で仕上げる。44～51は無文の口縁部で口縁部をやや肥厚させ，わずかに内弯する器形を呈する。44は口唇が先細り丸くおさまる。45～50は口唇を平坦に仕上げる。50は口縁が直口する。51は器壁が厚く，口唇も厚ぼったく丸くおさまる。52，53は胴部下位で53は器面をミガキ状の丁寧なナデで仕上げている。

Ⅶ類土器（第11図54～56）

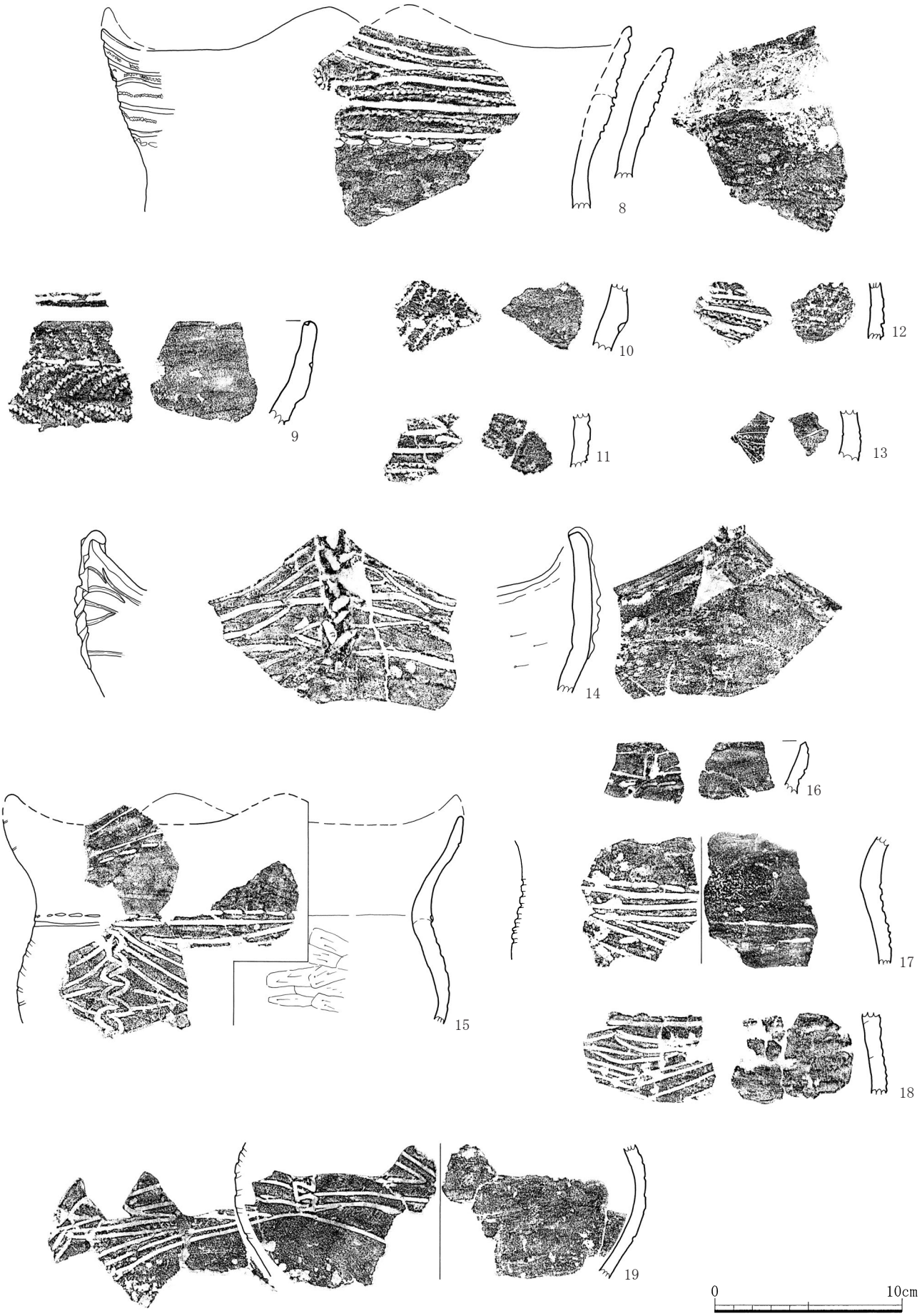
54，55は口縁部でわずかに外傾し，口唇部は丸くおさまる。外面に斜位の貝殻腹縁押引文が施される。胎土中に金雲母を多量に含有する。56は胴部片で胎土から同一個体と考えられる。

底部（第11図57～68）

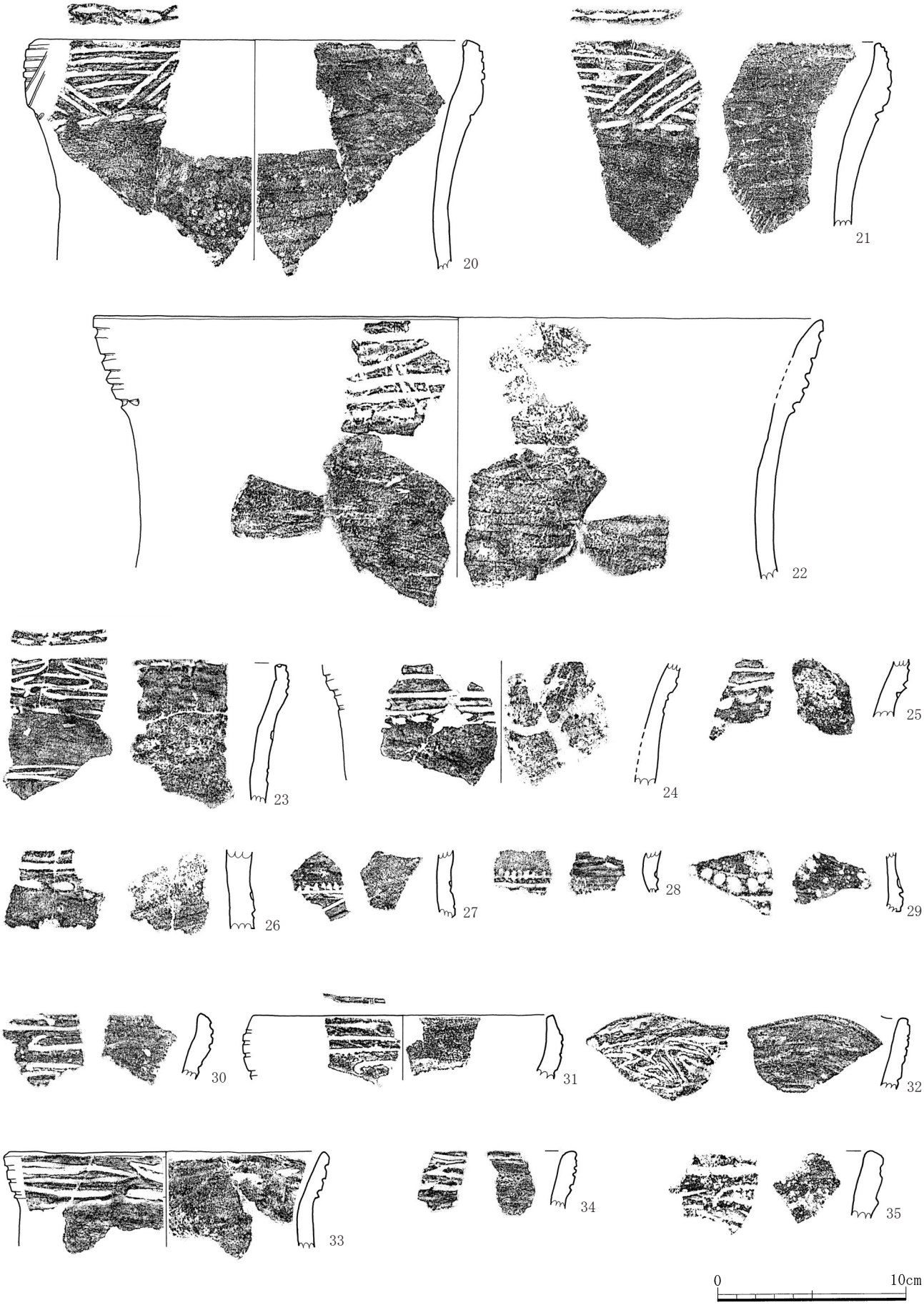
底部については類別ができなかったため一括した。57～64は下端から直に立ち上がり底部円盤の上位から外開きする。65～67は底部下端から外開きする。68は器壁が非常に薄く内外面ともに条痕が残る。わずかに上げ底となる。

土器観察表（１）

掲載番号	取上番号	器種	部位	類別	口径・底径	器高	文様・調整（外／内）		色調		胎土	焼成
							文様	調整	外面	内面		
1	388	深鉢	胴部	Ⅰ			ミミズばれ状突帯	外面：ナデ 内面：貝殻条痕のちナデ	褐灰色 （７．５ｙｒ４／１）	褐灰色 （７．５ｙｒ４／１）	石英，長石	良好
2	211 －	鉢	口縁	Ⅱ	（12．2）	（6．8）	－	外面：条痕のち一部ナデ 内面：条痕のちナデ	黄褐色 （１０ｙｒ５／６）	黄褐色 （１０ｙｒ５／６）	石英，砂粒	良好
3	216	深鉢	口縁	Ⅲ			沈線文	外面：ナデ 内面：条痕のちナデ	黒褐色 （１０ｙｒ３／１）	黄褐色 （１０ｙｒ５／６）	石英，砂粒	良好
4	36	－	口縁	Ⅳ			沈線文，竹管による刺突	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい黄色 （２．５ｙ６／４）	にぶい黄色 （２．５ｙ６／４）	砂粒，石英	良好
5	－	深鉢	口縁	Ⅳ			沈線文	外面：ナデ 内面：貝殻条痕，ナデ	にぶい黄褐色 （１０ｙｒ４／３）	にぶい黄褐色 （１０ｙｒ４／３）	石英，長石 軽石，砂粒	良好
6	587	深鉢	胴部	Ⅳ			沈線文	外面：丁寧なナデ 内面：工具ナデ	明褐色 （７．５ｙｒ５／５）	褐灰色 （７．５ｙｒ４／１）	石英，長石 赤色粒	良好
7	－	深鉢	胴部	Ⅳ			沈線文	外面：ナデ 内面：粗いナデ	明褐色 （７．５ｙｒ５／６）	褐灰色 （１０ｙｒ４／１）	石英，長石 角閃石	良好
8	148	深鉢	口縁	Ⅴ	（28．2）	（9．8）	沈線文，貝殻腹縁刺突文 連続短沈線文	外面：ナデ、ミガキ 内面：ミガキ様のナデ	にぶい褐色 （７．５ｙｒ５／）	にぶい褐色 （７．５ｙｒ５／４）	石英，長石 赤色岩片	良好
9	5	深鉢	口縁	Ⅴ			貝殻腹縁刺突	外面：ナデ 内面：ナデ	明褐色 （７．５ｙｒ５／６）	褐色 （１０ｙｒ４／４）	砂粒，赤色粒	良好
10	90	深鉢	胴部	Ⅴ			貝殻腹縁刺突	外面：ナデ 内面：ミガキ状の丁寧なナデ	褐灰色 （７．５ｙｒ４／１）	にぶい褐色 （７．５ｙｒ５／４）	石英，角閃石 赤色粒	良好
11	91 107	深鉢	胴部	Ⅴ			沈線文，貝殻腹縁刺突	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい橙色 （５ｙｒ６／４）	にぶい赤褐色 （５ｙｒ５／３）	石英，長石 角閃石，赤色粒	良好
12	47	深鉢	胴部	Ⅴ			沈線文，貝殻腹縁刺突	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい橙色 （７．５ｙｒ６／４）	にぶい黄橙色 （１０ｙｒ５／３）	石英，長石 赤色粒	良好
13	－	深鉢	胴部	Ⅴ			沈線文，貝殻腹縁刺突	外面：ナデ 内面：ナデ	灰褐色 （７．５ｙｒ４／２）	黒褐色 （１０ｙｒ３／２）	石英，長石 赤色粒	良好
14	256 397 79	深鉢	口縁	Ⅵ	（26.0）	（8．9）	沈線文	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい褐色 （７．５ｙｒ５／４）	にぶい褐色 （７．５ｙｒ５／３）	石英，長石	良好
15	102 150 290 －	深鉢	口縁	Ⅵ	（23．8）	（12．3）	沈線文，短沈線文	外面：丁寧なナデ 内面：上部は丁寧なナデ，下部は粗いナデ	黄褐色 （１０ｙｒ５／６）	にぶい黄褐色 （１０ｙｒ４／３）	石英，長石 砂粒，小礫	良好



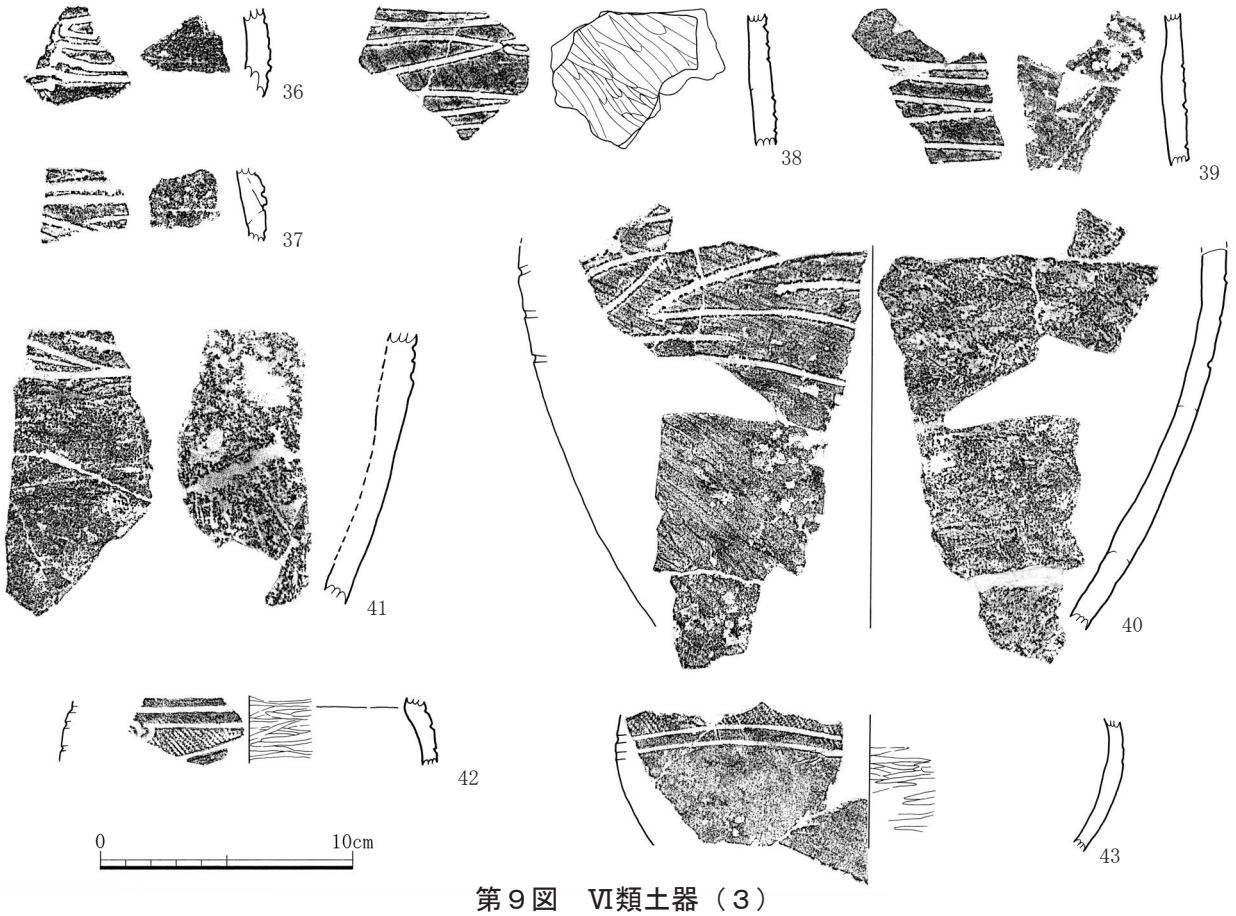
第７図　Ｖ類・Ⅵ類土器（１）



第８図　Ⅵ類土器（２）

土器観察表（２）

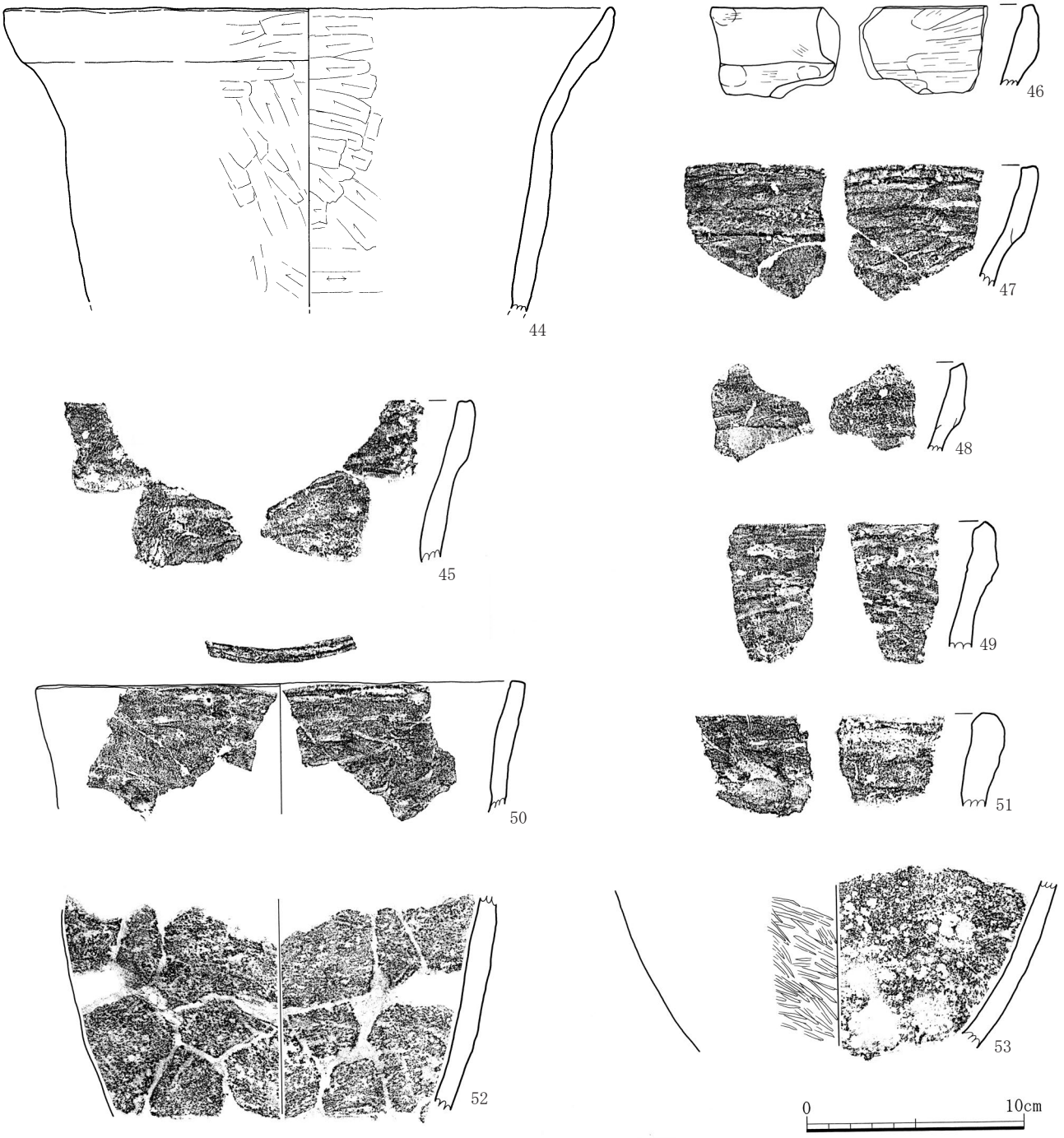
掲載番号	取上番号	器種	部位	類別	口径・底径	器高	文様・調整（外／内）		色調		胎土	焼成
							文様	調整	外面	内面		
16	－	深鉢	口縁	Ⅵ			沈線文	外面：ナデ 内面：ナデ	明褐色 （７．５ｙｒ５／６）	にぶい黄褐色 （１０ｙｒ５／４）	石英，小礫	良好
17	149	深鉢	胴部	Ⅵ			沈線文，短沈線	外面：丁寧なナデ 内面：丁寧なナデ	にぶい褐色 （７．５ｙｒ５／４）	褐色 （７．５ｙｒ４／４）	石英，長石 赤色粒	良好
18	151	深鉢	胴部	Ⅵ			沈線文	外面：丁寧なナデ 内面：丁寧なナデ	灰褐色 （７．５ｙｒ４／２）	黒褐色 （１０ｙｒ３／２）	石英，長石 小礫	良好
19	115 239 308 398 419 －	深鉢	胴部	Ⅵ			沈線文	外面：ナデ，ミガキ 内面：丁寧なナデ	にぶい褐色 （７．５ｙｒ５／４）	にぶい黄橙色 （１０ｙｒ６／３）	石英 長石 角閃石	良好
20	68 243 289	深鉢	口縁	Ⅵ	（23．0）	（12．3）	沈線文，短沈線	外面：ナデ 内面：ナデ	黄褐色 （１０ｙｒ５／６）	にぶい黄褐色 （１０ｙｒ５／４）	石英，長石 砂粒	良好
21	129	深鉢	口縁	Ⅵ			沈線文，刺突文	外面：ナデ 内面：条痕のちナデ	明褐色 （７．５ｙｒ５／６）	褐色 （１０ｙｒ４／４）	石英，長石 砂粒	良好
22	30 233 356 358	深鉢	口縁	Ⅵ	（38．6）	（14．0）	沈線文，短沈線	外面：工具ナデ 内面：工具ナデ	にぶい褐色 （７．５ｙｒ５／４）	灰黄褐色 （１０ｙｒ４／２）	石英，長石 角閃石 赤色岩片	良好
23	3 4	深鉢	口縁	Ⅵ			沈線文	外面：ナデ 内面：ナデ	明褐色 （７．５ｙｒ５／６）	明褐色 （７．５ｙｒ５／６）	石英，小礫	良好
24	40 240 241 242	深鉢	胴部	Ⅵ			沈線文，刺突文	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい褐色 （７．５ｙｒ５／４）	褐灰色 （７．５ｙｒ４／１）	石英，長石	良好
25	207	深鉢	口縁	Ⅵ			沈線文，刺突文	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい褐色 （７．５ｙｒ５／４）	褐灰色 （７．５ｙｒ４／１）	石英，長石 岩片	良好
26	245	深鉢	胴部	Ⅵ			沈線文，短沈線文	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい橙色 （７．５ｙｒ６／４）	灰褐色 （７．５ｙｒ５／２）	石英，長石 角閃石，赤色粒	良好
27	110	深鉢	胴部	Ⅵ			沈線文，刺突文	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい黄橙色 （１０ｙｒ６／３）	灰黄褐色 （１０ｙｒ５／２）	石英，長石 角閃石	良好
28	281	深鉢	胴部	Ⅵ			沈線文，刺突文	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい褐色 （７．５ｙｒ５／４	黒褐色 （１０ｙｒ３／１）	石英，長石	良好
29	－	深鉢	胴部	Ⅵ			沈線文，凹点文	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい赤褐色 （５ｙｒ５／４）	にぶい赤褐色 （５ｙｒ５／４）	石英，長石 角閃石	良好
30	88	深鉢	口縁	Ⅵ			沈線文	外面：ナデ 内面：ナデ	黄褐色 （１０ｙｒ５／６）	暗灰黄褐色 （２．５ｙ４／２）	石英，小礫	良好
31	表	深鉢	口縁	Ⅵ	（16．0）	（3．4）	沈線文	外面：ナデ 内面：ナデ	褐色 （１０ｙｒ４／４）	暗褐色 （１０ｙｒ３／３）	石英，長石 小礫	良好
32	304	深鉢	口縁	Ⅵ			沈線文	外面：ナデ 内面：ナデ	橙色 （７．５ｙｒ６／６）	橙色 （７．５ｙｒ６／６）	石英，砂粒	良好
33	159 300	深鉢	口縁	Ⅵ	（16．8）	（5．1）	沈線文	外面：ナデ 内面：ナデ	褐色 （１０ｙｒ４／４）	褐色 （１０ｙｒ４／４）	石英，砂粒	良好
34	297	深鉢	口縁	Ⅵ			沈線文	外面：ナデ 内面：ナデ	褐色 （１０ｙｒ４／４）	黒褐色 （１０ｙｒ２／３）	石英，砂粒	良好
35	390	深鉢	口縁	Ⅵ			沈線文	外面：ナデ 内面：ナデ	明赤褐色 （５ｙｒ５／６）	明赤褐色 （５ｙｒ５／６）	石英，長石 赤色粒，小礫	良好
36	324	深鉢	口縁	Ⅵ			沈線文	外面：ナデ 内面：ミガキ状のナデ	灰黄褐色 （１０ｙｒ５／２）	灰黄褐色 （１０ｙｒ４／２）	石英，長石 角閃石，赤色粒	良好
37	204	深鉢	胴部	Ⅵ			沈線文	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい黄橙色 （１０ｙｒ６／４）	にぶい橙色 （７．５ｙｒ６／４）	石英，長石	良好
38	202 336	深鉢	胴部	Ⅵ			沈線文	外面：丁寧なナデ 内面：ミガキ	黒褐色 （１０ｙｒ２／２）	灰黄褐色 （１０ｙｒ４／２）	石英，長石 赤色粒	良好



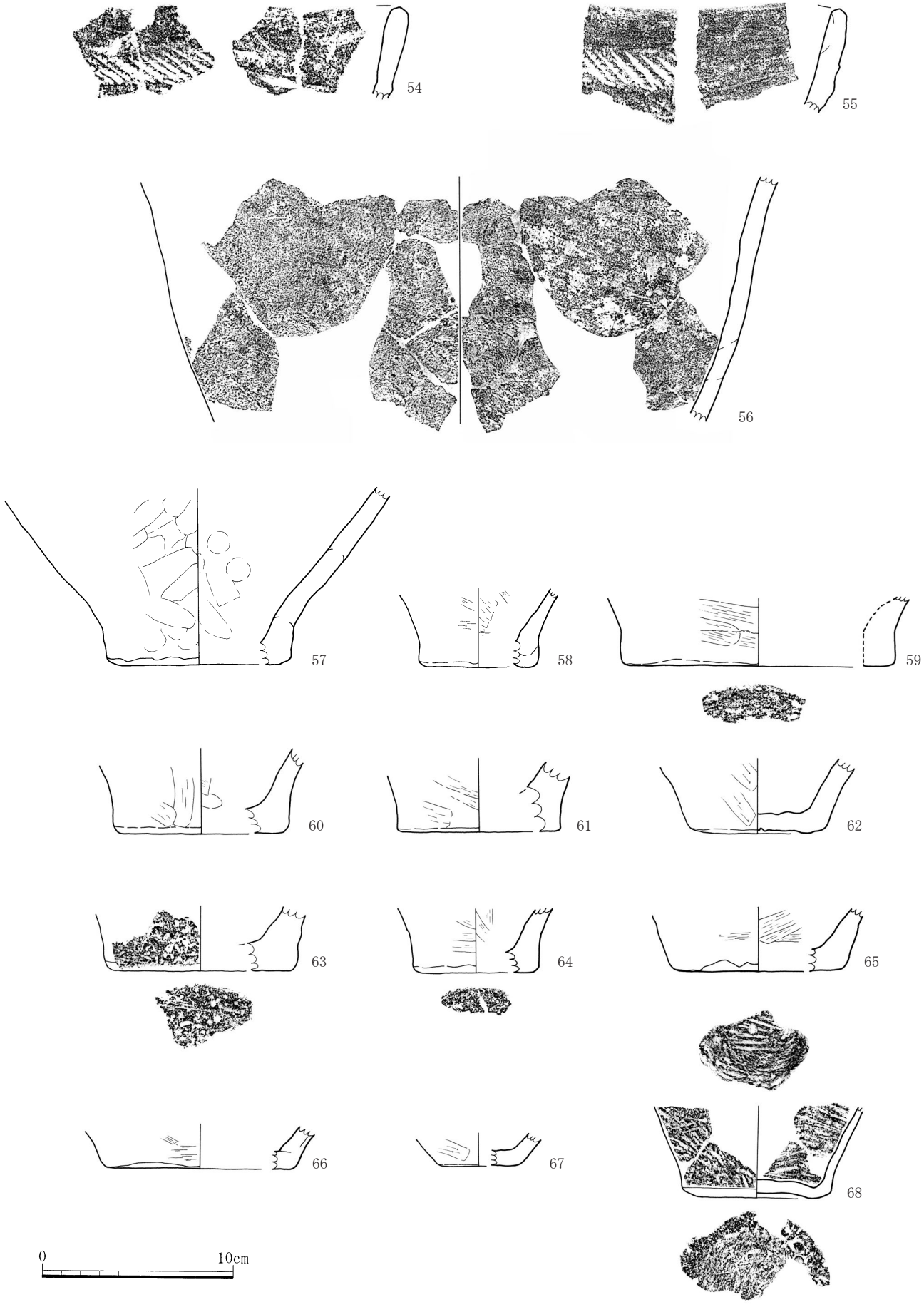
第９図　Ⅵ類土器（３）

土器観察表（３）

掲載番号	取上番号	器種	部位	類別	口径・底径	器高	文様・調整（外／内）		色調		胎土	焼成
							文様	調整	外面	内面		
39	－	深鉢	胴部	Ⅵ			沈線文	外面：丁寧なナデ 内面：ミガキ状のナデ	褐色 （７．５ｙｒ４／４）	灰黄褐色 （１０ｙｒ４／３）	石英，長石 赤色粒	良好
40	256 307 309 318 －	深鉢	胴部	Ⅵ			沈線文	外面：ミガキ状のナデ 内面：工具ナデのちナデ	にぶい橙色 （７．５ｙｒ６／４）	にぶい褐色 （７．５ｙｒ５／４）	石英，長石 角閃石 赤色粒	良好
41	121 163 284	深鉢	胴部	Ⅵ			沈線文	外面：粗い工具ナデ 内面：不明	にぶい褐色 （７．５ｙｒ５／４）	にぶい黄褐色 （１０ｙｒ５／４）	石英，長石 角閃石	良好
42	120	深鉢	胴部	Ⅵ			磨消縄文	外面：ミガキ 内面：ミガキ	灰黄褐色 （１０ｙｒ４／２）	黒褐色 （１０ｙｒ３／２）	石英，長石 雲母	良好
43	109 286 299	深鉢	胴部	Ⅵ			磨消縄文	外面：ミガキ 内面：ミガキ	にぶい褐色 （７．５ｙｒ５／４）	黒褐色 （１０ｙｒ３／２）	石英，長石 雲母，赤色粒	良好
44	12 46 228 229 349	深鉢	口縁	Ⅵ	（27．5）	（14．0）	－	外面：ミガキ状の丁寧なナデ 内面：工具ナデのちミガキ状の丁寧なナデ	にぶい赤褐色 （５ｙｒ５／４）	黒褐色 （７．５ｙｒ３／１）	石英，長石	良好
45	152 403	深鉢	口縁	Ⅵ			－	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい黄褐色 （１０ｙｒ５／４）	明黄褐色 （１０ｙｒ６／６）	石英，小礫	良好



第１０図　Ⅵ類土器（４）



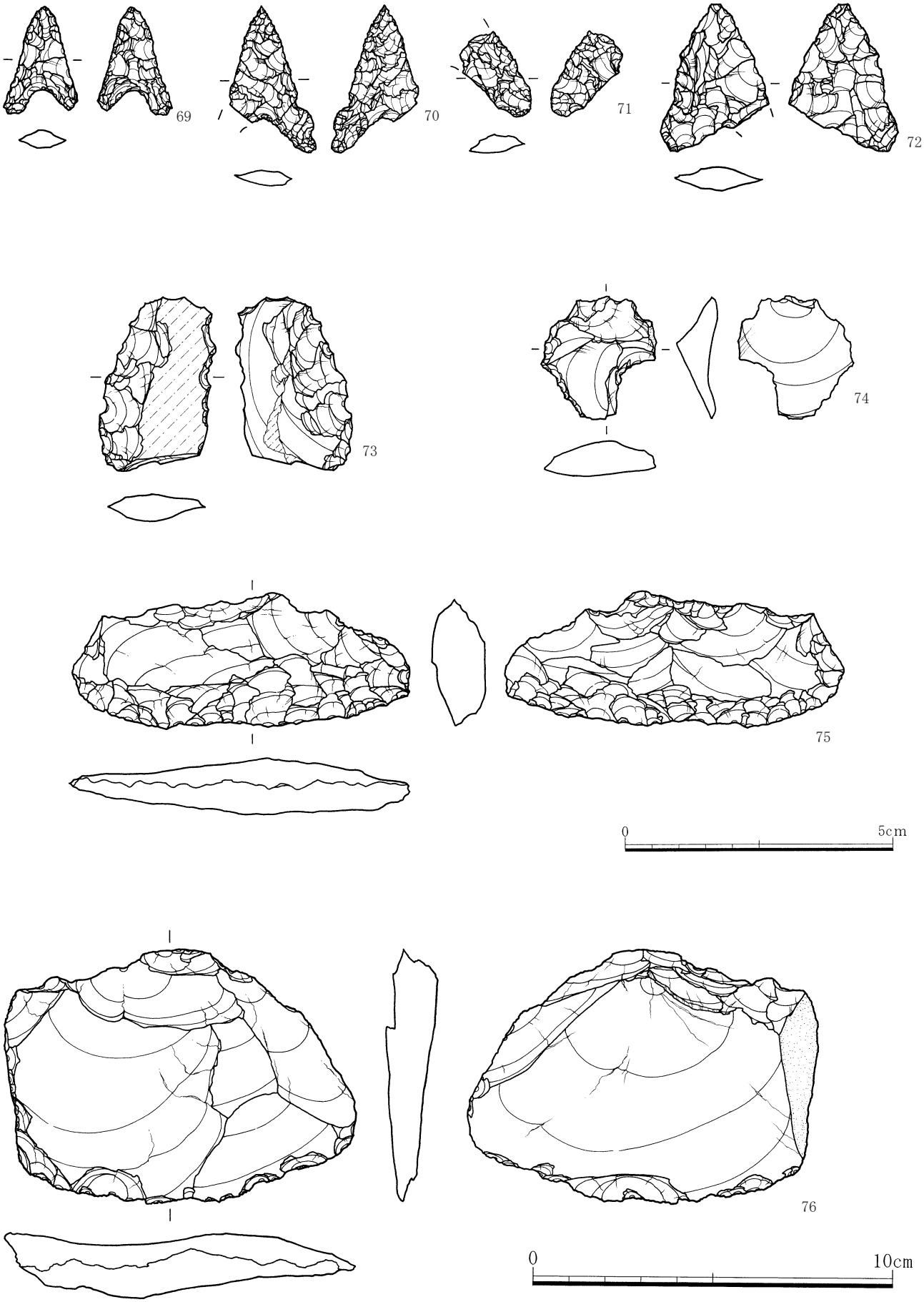
第 11 図　Ⅶ類土器・底部

土器観察表（４）

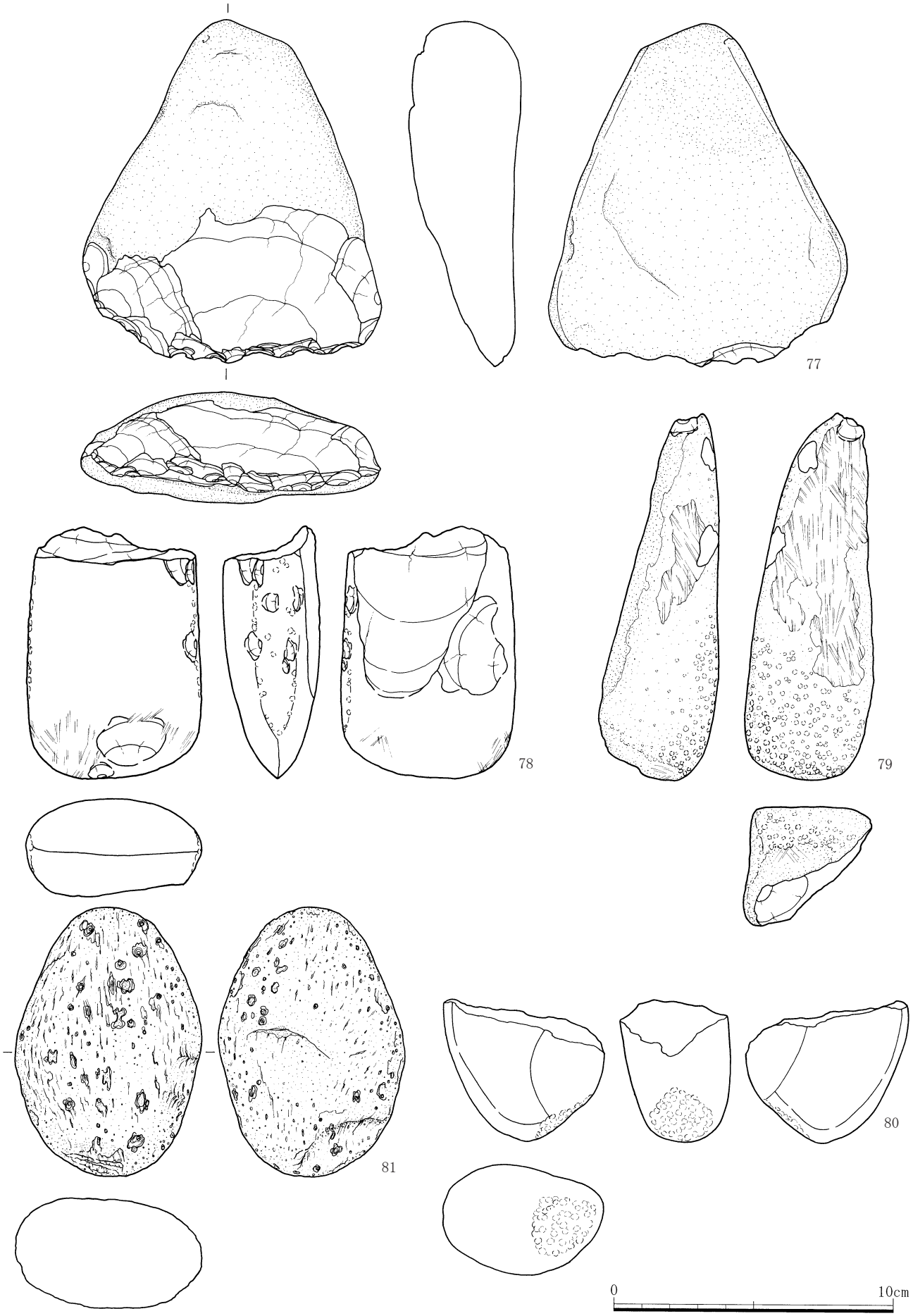
掲載番号	取上番号	器種	部位	類別	口径・底径	器高	文様・調整（外／内）		色調		胎土	焼成
							文様	調整	外面	内面		
46	266	深鉢	口縁	Ⅵ			－	外面：指頭圧痕 内面：ヘラナデのちナデ	黒褐色 （１０ｙｒ３／２）	黒褐色 （１０ｙｒ３／２）	石英，砂粒	良好
47	80 114	深鉢	口縁	Ⅵ			－	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい黄褐色 （１０ｙｒ５／４）	にぶい黄褐色 （１０ｙｒ５／４）	石英，小礫	良好
48	246	深鉢	口縁	Ⅵ			－	外面：ナデ 内面：ナデ	明褐色 （７．５ｙｒ５／６）	明褐色ｘ （７．５ｙｒ５／６）	石英，赤色粒 小礫	良好
49	65	深鉢	口縁	Ⅵ			－	外面：ナデ 内面：ナデ	褐色 （１０ｙｒ４／４）	褐色 （１０ｙｒ４／４）	赤色粒，小礫	良好
50	113	深鉢	口縁	Ⅵ	（22．０）	（６．０）	－	外面：ナデ 内面：ナデ	黄褐色 （１０ｙｒ５／６）	褐色 （１０ｙｒ４／４）	石英，砂粒	良好
51	191	深鉢	口縁	Ⅵ			－	外面：ナデ 内面：ナデ	明褐色 （７．５ｙｒ５／６）	明褐色 （７．５ｙｒ５／６）	石英，小礫	良好
52	41 69 103 135 136 138 142 143 156 276 296	深鉢	胴部	Ⅵ			－	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい橙色 （７．５ｙｒ６／４）	にぶい黄橙色 （１０ｙｒ６／４）	石英，長石	良好
53	125 130	深鉢	胴部	Ⅵ			－	外面：ミガキ 内面：ナデ	にぶい赤褐色 （５ｙｒ５／４）	にぶい黄褐色 （１０ｙｒ５／３）	石英，長石 角閃石	良好
54	99 450	深鉢	口縁	Ⅷ			貝殻腹縁刺突？	外面：ナデ 内面：ナデ	明褐色 （７．５ｙｒ５／６	明褐色 （７．５ｙｒ５／６）	石英，金雲母 小礫	良好
55	361	深鉢	口縁	Ⅷ			押し引き文	外面：ナデ 内面：ナデ	明褐色 （７．５ｙｒ５／６）	明褐色 （７．５ｙｒ５／６）	石英，金雲母 小礫	良好
56	116 118 183 268 278 283 294	深鉢	胴部	Ⅷ			－	外面：ナデ 内面：ナデ	暗褐色 （１０ｙｒ３／４）	暗褐色 （１０ｙｒ３／４）	石英 雲母 砂粒	良好
57	235 272 274 321 360 －	深鉢	底部	－	（８．６）	（９．４）	－	外面：丁寧なナデ 内面：ナデ，指頭圧痕	橙色 （５ｙｒ６／６）	にぶい黄橙色 （１０ｙｒ７／３）	石英 長石 赤色粒	良好
58	340	深鉢	底部	－	（５．５）	（４．２）	－	外面：ミガキ状の丁寧なナデ 内面：工具ナデのちミガキ状の丁寧なナデ	赤褐色 （５ｙｒ４／８）	黒色 （７．５ｙｒ２／１）	石英，長石 赤色粒	良好
59	25	深鉢	底部	－	（12．０）	（３．５）	－	外面：ナデ 内面：－	にぶい橙色 （７．５ｙｒ６／４）	－	石英，長石 赤色粒	良好
60	14 20	深鉢	底部	－	（８．６）	（４．５）	－	外面：ヘラナデのちナデ 内面：ナデ	明褐色 （７．５ｙｒ５／６	明褐色 （７．５ｙｒ５／６	石英，砂粒	良好
61	－	深鉢	底部	－	（８．０）	（３．７）	－	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい黄橙色 （１０ｙｒ６／４）	灰黄褐色 （１０ｙｒ６／２）	石英，長石 角閃石	良好
62	131	深鉢	底部	－	（５．２）	（４．０）	－	外面：ヘラナデのちナデ 内面：ナデ	褐色 （７．５ｙｒ４／４）	褐色 （７．５ｙｒ４／４）	石英，砂粒 長石	良好
63	2	深鉢	底部	－	（９．６）	（３．５）	－	外面：ヘラナデのちナデ 内面：ナデ	明赤褐色 （５ｙｒ５／６）	黒褐色 （１０ｙｒ３／１）	石英，砂粒	良好
64	394	深鉢	底部	－	（５．８）	（３．４）	－	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい橙色 （７．５ｙｒ６／４）	にぶい黄褐色 （１０ｙｒ５／３）	石英，長石 赤色粒	良好
65	319	深鉢	底部	－	（８．４）	（３．４）	－	外面：ヘラナデのちナデ 内面：ヘラナデ	明黄褐色 （１０ｙｒ６／６）	明黄褐色 （１０ｙｒ６／６）	石英，砂粒	良好
66	100	深鉢	底部	－	（９．６）	（２．３）	－	外面：ナデ 内面：ナデ	灰黄褐色 （１０ｙｒ５／２）	にぶい褐色 （７．５ｙｒ５／４）	石英，長石 角閃石，赤色粒	良好
67	24	深鉢	底部	－	（４．６）	（１．８）	－	外面：ヘラナデのちナデ 内面：ナデ	明褐色 （７．５ｙｒ５／６）	褐色 （７．５ｙｒ４／３）	石英，砂粒	良好
68	145 333 334	深鉢	底部	－	（６．０）	（４．７）	－	外面：工具ナデのちナデ 内面：工具ナデ	にぶい赤褐色 （５ｙｒ５／４）	にぶい褐色 （７．５ｙｒ５／３）	石英，長石	良好

石器（第12図69～第13図81）

69～72は石鏃である。69はやや灰色がかった黒曜石を使用する二等辺三角形の石鏃で抉りが深い。70は69と比較してひとまわり大きく，逆刺が鋸歯状となるが，一方の逆刺が欠損しているため意図的なものか，製作時のアクシデントによるものなのか判然としない。71は黒を基調とし，ガラス光沢の強い黒曜石を用いた石鏃の逆刺部片である。72はやや灰色がかった黒曜石を使用する二等辺三角形の石鏃で，抉りが浅い。73は灰色を呈する頁岩で，石鏃未製品と思われる。一部に節理面が残り，一側縁の表裏に押圧剥離痕がみられる。74はやや灰色を帯びた黒曜石で側縁の一部に微細な剥離痕がみられる，二次加工剥片である。75は黒色の硬質頁岩であるが外面は風化して灰白色を呈する。横長の剥片の下端に表裏両面に押圧剥離が施されるスクレイパーである。76は灰色の硬質頁岩でやや横長の剥片の下端に刃部を施すスクレイパーである。77は白色を呈する頁岩で自然面を残しつつ，下端に刃部をもうける。スクレイパーと捉えたが，重量もあることから，土掘り具の可能性も考えられる。78は安山岩で，全体を敲打により整形し，先端を磨いた局部磨製石斧である。79は安山岩で，平坦面に主として縦方向の擦痕がみられ，砥石として利用されていたと考えられる。また擦面が敲打により剥落している部分があり，砥石利用の後，敲石として再利用されていたものと思われる。80は砂岩製の敲石で，円礫側縁の一部に敲打痕が確認できる。81は軽石製品と思われ，やや扁平な楕円形を呈する。用途は不明である。



第12図　石器（1）



第13図　石器（２）

石器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	グリッド	層位	器種	石材	計測値				備考
							長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	
12	69	568	B－4	Ⅲa	石鏃	黒曜石	20.0	14.0	3.5	0.6	
	70	412	A－4	Ⅲa	石鏃	黒曜石	27.5	16.5	3.0	0.8	
	71	表採	－	－	石鏃	黒曜石	17.0	10.0	3.0	0.6	
	72	442	B－4	Ⅲa	石鏃	黒曜石	28.0	21.0	5.0	1.6	
	73	175	A－4	Ⅲa	石鏃未製品	頁岩	32.0	22.0	5.0	3.6	
	74	559	A－4	Ⅲa	二次加工剥片	黒曜石	23.0	22.0	7.8	2.3	
	75	表採	－	－	スクレイパー	硬質頁岩	22.5	63.5	10.5	14.4	
	76	221	B－4	Ⅲa	スクレイパー	硬質頁岩	98.0	71.5	18.5	110.5	
13	77	380	B－4	Ⅲa	スクレイパー	頁岩	124.0	108.0	40.0	556.0	
	78	217	B－4	Ⅲa	磨製石斧	安山岩	90.5	63.5	35.0	299.0	
	79	332	B－4	Ⅲa	砥石	安山岩	132.0	47.0	43.0	261.0	
	80	338	B－4	Ⅲa	敲石	砂岩	52.0	58.0	40.0	131.0	
	81	220	B－4	Ⅲa	軽石製品	軽石	97.0	67.5	40.0	51.0	

２　弥生時代の調査

（１）調査の概要

弥生時代の調査は，縄文時代の調査同様，遺物包含層の残存するＡ・Ｂ－４・５区を中心に行った。バックホーにより表土を除去すると直下にⅢa層が現れ，そこから人力による掘り下げを行った。

遺物は少量出土するにとどまり，遺物の種類，出土層を遺物台帳に記録し，トータルステーションを用いて座標，レベルを記録した。

遺構は検出されなかった。

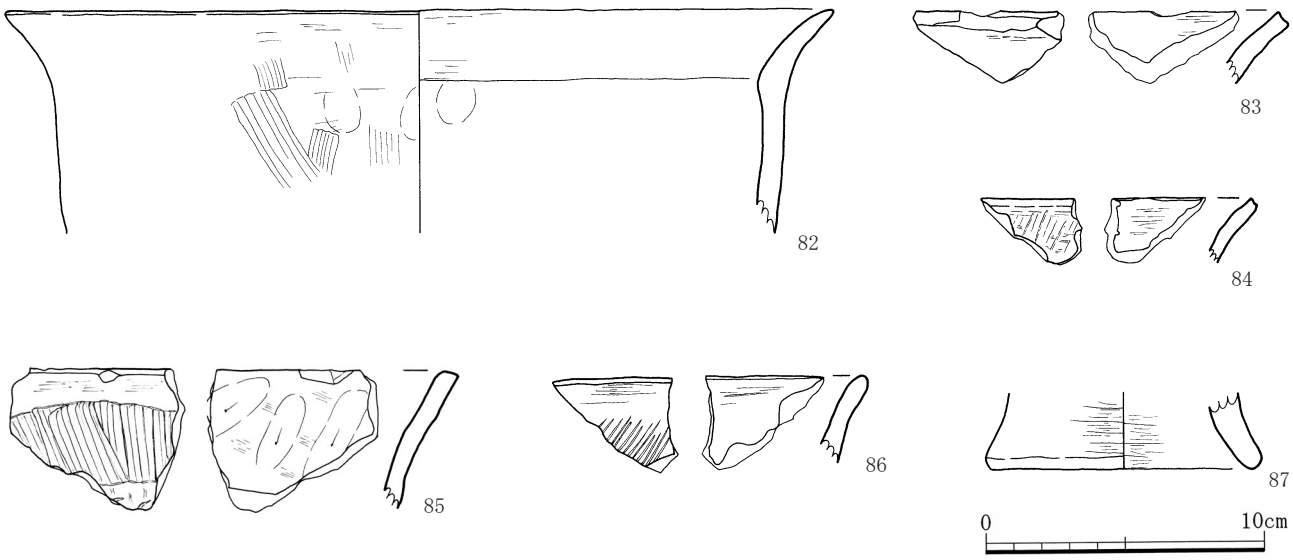
（２）遺物

遺物はＡ・Ｂ－４・５区を中心に出土した。縄文時代の遺物もほぼ同レベルにみられ，層位的に安定している状況ではなかった。

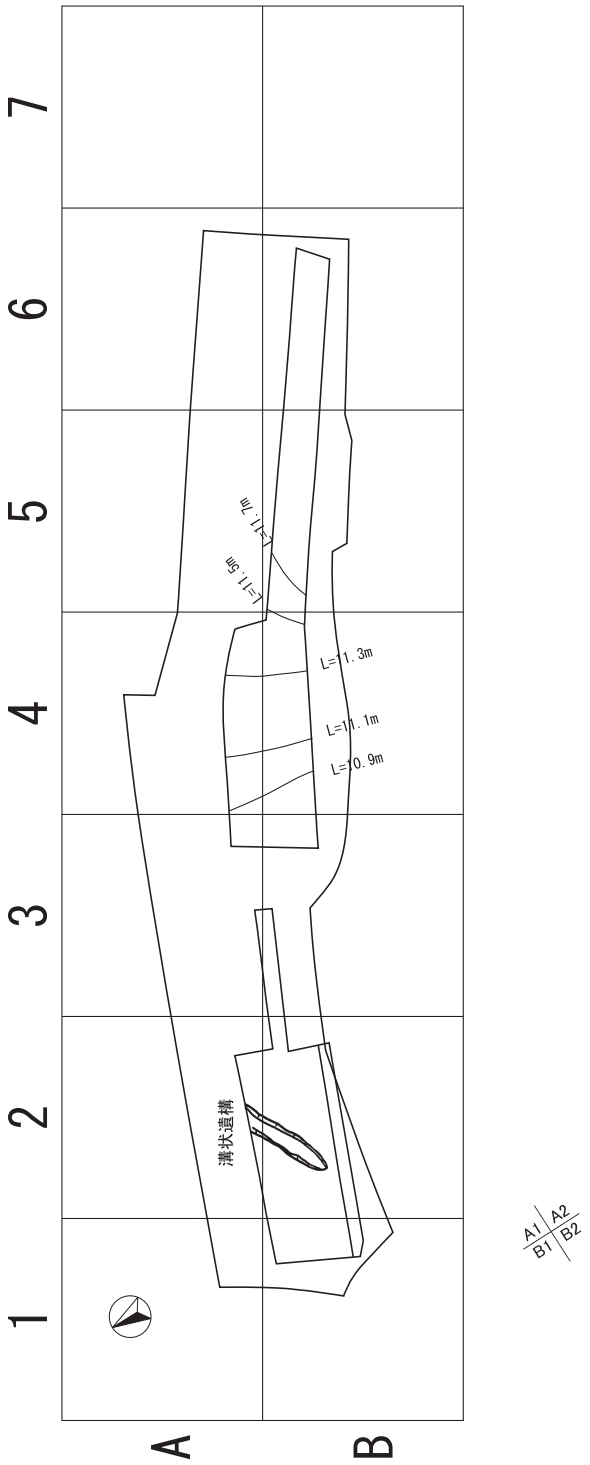
土器

Ⅷ類土器（第14図82～87）

82～86は甕の口縁部で，82は器壁が薄く口縁部で外反する器形である。屈曲部内面に明瞭な稜線を形成し，口唇は先細る。83～85は口唇部が平坦となる口縁である。87は甕の脚部片で内傾し，わずかに外反しながら立ち上がる器形である。



第 14 図　Ⅷ類土器



第 15 図　遺構配置図

3　その他の時代の調査

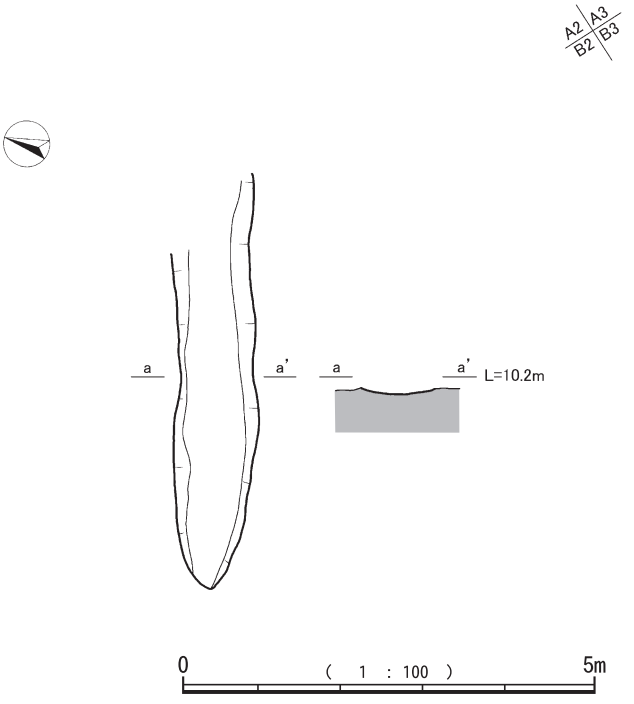
（1）調査の概要

A・B−2区で表土を除去するとⅣa層・Ⅳb層が現れ，調査の結果，遺物の出土はみられず，表土直下で溝状の遺構が検出されたのみであった。

（2）遺構

溝状遺構

表土を除去したあと，黒色土を埋土とする浅い溝状の遺構が検出された。長さ約4.5m，幅約１m，深さは最大５cmほどで東西方向に延びている。遺物等の出土がみられないことから，時代の特定には至らなかった。



第 16 図　溝状遺構検出状況

土器観察表（５）

掲載番号	取上番号	器種	部位	類別	口径・底径	器高	文様・調整（外／内）		色調		胎土	焼成
							文様	調整	外面	内面		
82	32 33	甕	口縁	Ⅷ	(29.6)	(8.1)	−	外面：ハケメ，ナデ，指頭圧痕 内面：ハケメのちナデ，指頭圧痕	にぶい黄橙色 （10yr7／4）	明黄褐色 （10yr7／6）	石英，角閃石 長石	良好
83	93	甕	口縁	Ⅷ			−	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい黄橙色 （10yr7／4）	にぶい黄橙色 （10yr7／4）	石英，長石 赤色粒	良好
84	78	甕	口縁	Ⅷ			−	外面：ハケメ，ナデ 内面：ナデ	にぶい褐色 （7．5yr5／4）	にぶい橙色 （7．5yr6／4）	石英，長石 角閃石	良好
85	325	甕	口縁	Ⅷ			−	外面：ハケメ，ナデ 内面：ナデ，指頭圧痕	橙色 （7．5yr6／6）	にぶい橙色 （7．5yr6／4）	石英，角閃石 長石，赤色粒	良好
86	259	甕	口縁	Ⅷ			−	外面：ハケメ，ナデ 内面：ナデ	にぶい褐色 （7．5yr5／3）	明赤褐色 （5yr5／6）	石英，長石 角閃石，赤色粒	良好
87	32	甕	脚	Ⅷ	(9.2)	(2.8)	−	外面：ナデ 内面：ナデ	にぶい黄橙色 （10yr6／3）	にぶい黄橙色 （10yr7／4）	石英，長石 角閃石	良好

第4章　総括

縄文時代

遺物

Ⅰ類は，外面に横走するミミズばれ状突帯が数条巡り，内面調整に貝殻条痕がみられることから轟式土器と判断した。

Ⅱ類は，口縁部器形がわずかに内弯し，外面に縦位の貝殻条痕を施す。

Ⅲ類は，口縁部がわずかに外反し，口縁下位に１条のミミズばれ状の突帯が巡る。その下位に同様の突帯が，縦位から斜位に施され，直線的な沈線が組み合わさる。上記の特徴から，Ⅱ・Ⅲ類は深浦式土器鞍谷段階を想定した。

Ⅳ類は，２条１単位の沈線文が施されることから，指宿式土器と判断した。

Ⅰ類からⅣ類は，遺跡内からの出土点数がごくわずかなため，当遺跡に当時の活動の主体があったかは判然としない。遺跡南側の台地は郷ノ原遺跡も存在する良好な地形であり，台地上に関連する遺跡が存在する可能性も考えておきたい。

Ⅴ類は，口縁部がわずかに外傾から内弯する形状で，器面に沈線，連点が施され，沈線間に貝殻腹縁刺突による磨消縄文を意識した文様が施されることから，納曽式土器と判断した。

Ⅵ類土器は，胴部から緩いカーブを描きながらわずかに外傾し立ち上がる器形を呈し，口縁部でわずかに内弯する。口縁部と胴部に文様帯があり，沈線や連点が巡る。一部の土器は，沈線で区画された部分に磨消縄文が施される。また，同様な器形を呈する無文の土器を一括した。器形，文様の特徴から，辛川式土器を想定している。

Ⅶ類土器は，口縁下位に斜位の連続した貝殻腹縁刺突文が巡り，胎土に金雲母が目立つのが特徴であり，丸尾式土器と判断した。

弥生時代

遺物

遺物の出土が少量で器形のわかるものが１点しか出土していないため，Ⅷ類として一括した。82は口縁部で外反し，口縁部の屈曲部内面にわずかに稜線を形成することから，中津野式土器と判断した。

その他の時代

遺構

Ａ・Ｂ－２区で検出された東西方向に延びる溝状遺構は，削平のため最下面が，わずか数ｃｍ残存するにとどまり，遺物も伴わないことから時代の特定もできなかった。

しかし，現況の地図と遺構検出状況を重ね合わせると旧南薩鉄道の軌道方向に登る坂道と調査で検出された溝状遺構が同じ方向に直線上に並ぶことが確認できた。（第1図 グリッド配置と周辺地形参照）つまり，法面に構築された坂道と遺跡内で見つかった溝状遺構の配置関係は，法面構築及び登り坂設置の際には，溝状遺構が何らかの形で認識できていた可能性を示している。

この場所は，大正から昭和にかけての南薩鉄道建設時に削平・盛土を行い法面が構築されており，溝状遺構の所産は，それ以前の近世から近代にかけての時代を想定しておきたい。

参考文献

○　鹿児島県立埋蔵文化財センター1997『干迫遺跡』
　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(21)
○　相模伊久雄2009「深浦式土器」
　『南九州縄文通信』第20号刊行記念研究会資料
○　水ノ江和同・前迫亮一2010「九州」
　『西日本の縄文土器　後期』

写真図版

図版1

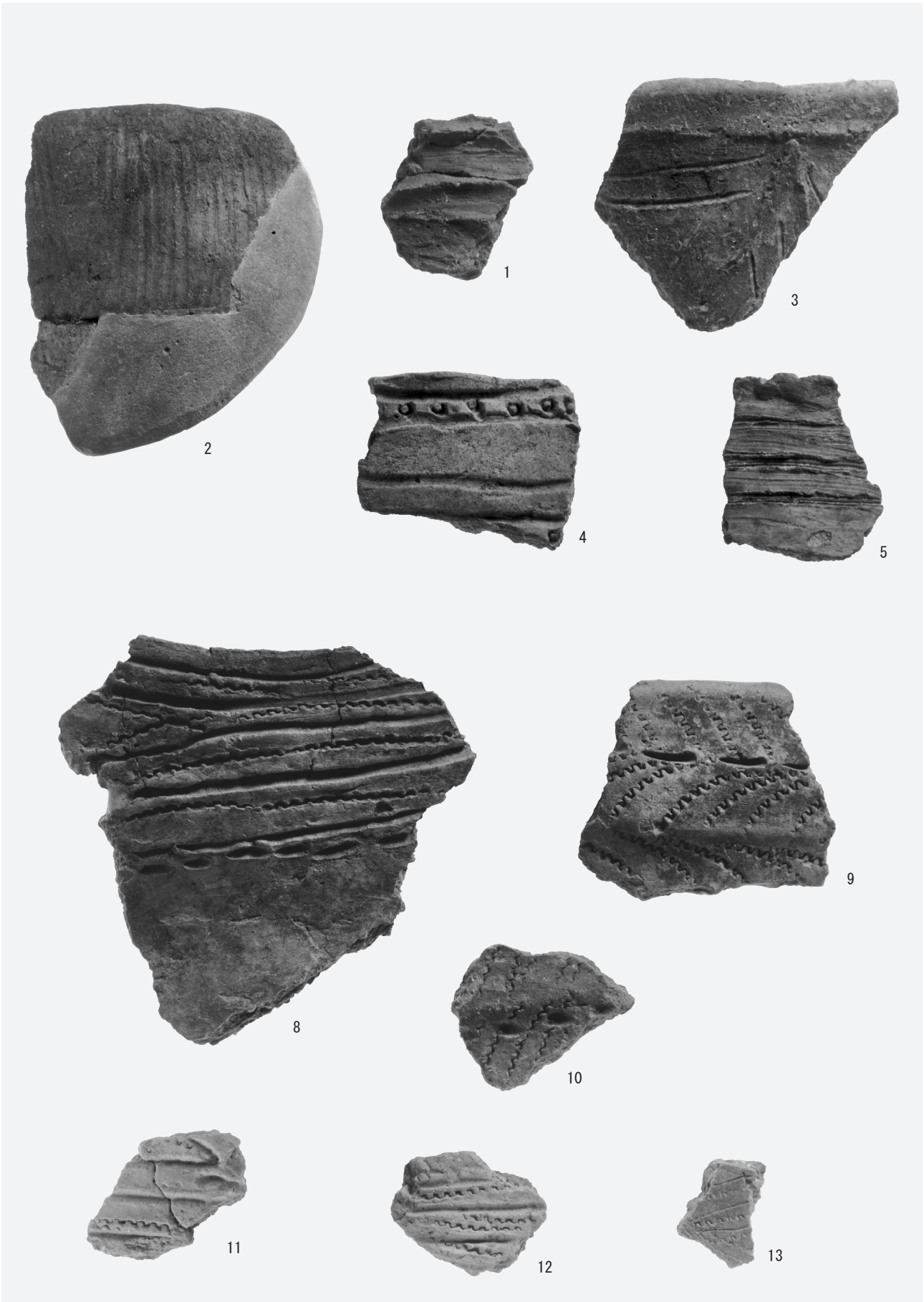
発掘調査（１）

①遺跡遠景　②B−1・2区土層断面　③B−4〜7区土層断面

図版２

図版２　発掘調査（２）

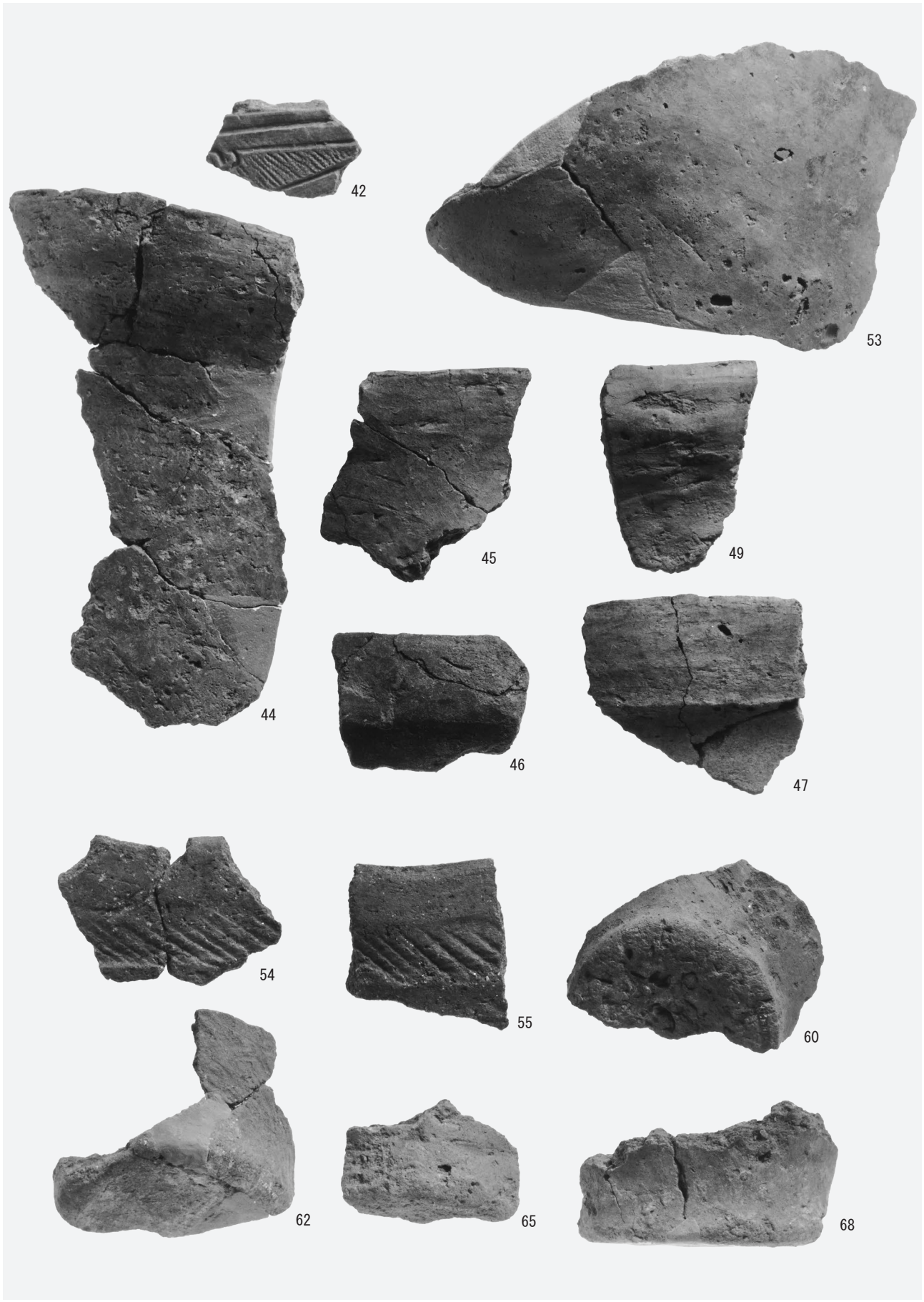
①A・B−３～５区 遺物出土状況　②B−４区 黒曜石等チップ出土状況　③A・B−２区 溝状遺構検出状況
④溝状遺構埋土断面　⑤溝状遺構完掘状況　⑥A・B−３～５区 完掘状況



Ⅰ～Ⅴ類土器

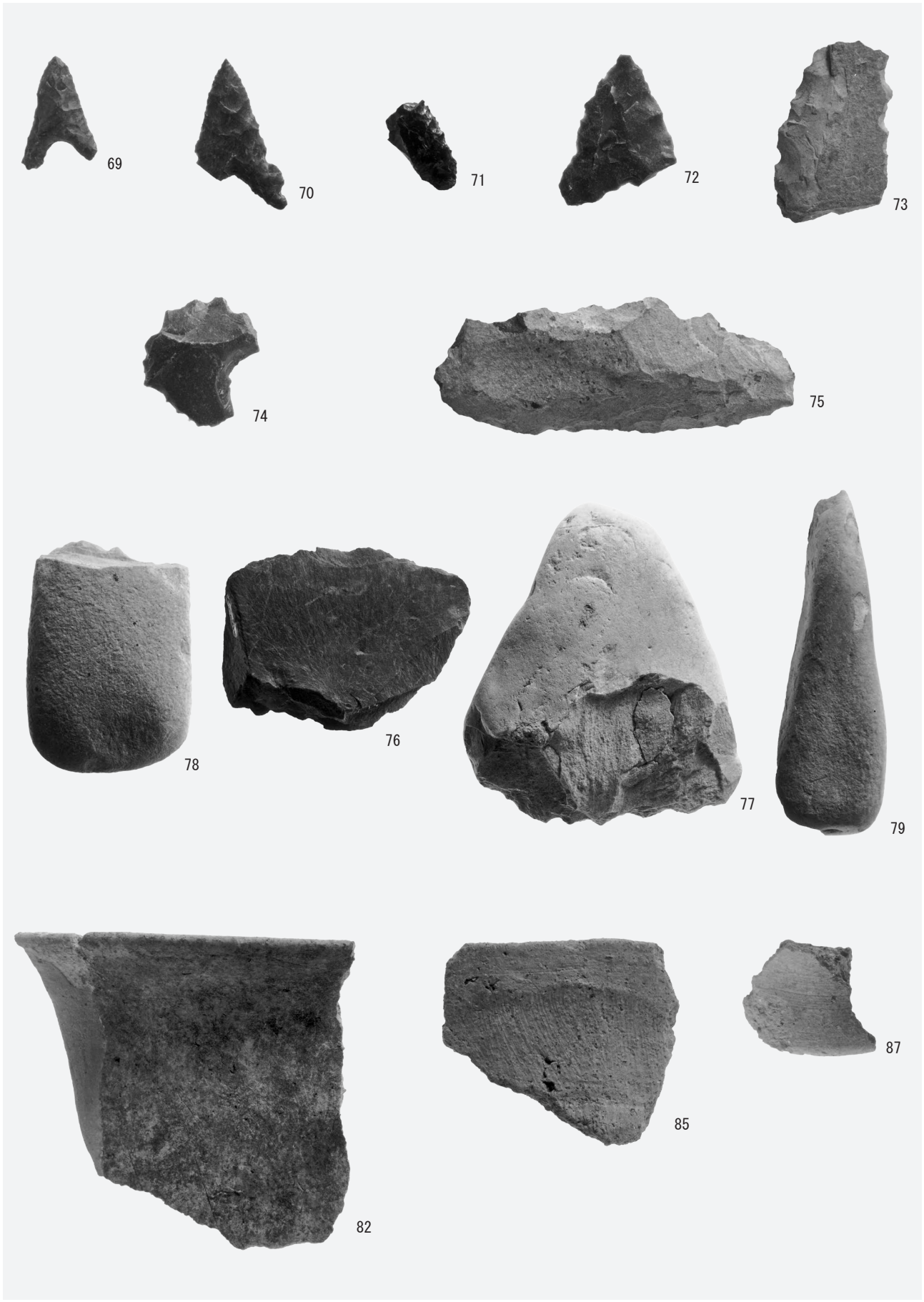
図版4

Ⅵ類土器（１）



Ⅵ類土器（２），Ⅶ類土器，底部

図版6



石器，Ⅷ類土器

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（184）

弥十山遺跡

（南さつま市金峰町）

発行年月　２０１５年３月

編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-48-5811　FAX　0995-48-5821

印刷所　株式会社プリンティング三州
〒892-0871
鹿児島鹿児島市吉野5501番地４
TEL　099-244-3334

鹿児島県